
道の向こう

高田昇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

道の向こう

【Nコード】

N40730

【作者名】

高田昇

【あらすじ】

日露戦争で惜敗した事により現代まで存続する大日本帝国は、明治の時代を生きた男の呪いにより戦争の道を歩み続ける事となる。

序章（前書き）

更新は月に1、2回のペースで行きたいのですが、話を進めるにあたり様々な資料を読みあさったり他の作品も仕上げたりして行かねばいけないので更新のペースが遅れる恐れがありますが御了承ください。

序章

内地

私が意識を戻した時には、病室のベッドの上だった。

そして、戦争が終わっていた。我が皇軍の、大日本帝国の勝利だった。

私は軍人として、一人の日本人としてこの勝利に喜んだ。

しかし、心中に一つの不安が過る。確かに日本は戦争に勝った事でアジアの覇権国となっていく事になるだろう。問題はその後がどうなるかだ。

数十年の昔アメリカ合衆国と同盟を締結し、今度の戦争で共通の敵と共に戦った事で戦争に勝った。

『共通の敵』がいなくなればどうなる？ 国家というものは、他の国家を『敵』として見なければいけない。国家間の同盟は『敵の敵は味方』なのだ。

それに、日本はこれからどうなっていく？ アジアの覇権国となったが、これまで通りアジア諸外国と対等に付き合っていくのだろうか？

敵国だった国とはどうなる？ 敵国が我が国や同胞に齎した戦争の傷痕は、私や日本人は決して許しはしないだろう。

だからと言って、これからは我々が彼等を蔑んだり蛮行を行って

良いかと言えばそうではない。

源平の時代、源氏を破った平氏は『平氏で無いものは人にあらず』と謳い、平氏第一主義と思わせる悪政を行っていったため人々から恨まれ、最期には壇ノ浦の合戦において悲運な末路をたどる因果応報の話は誰もが知っている。

私は、日本が平家の様になるのではないかと心配でならない。

今にして思えば、この戦争は私の曾祖父が明治の時代に残していた呪いとも言うべき執念から起こったと考えてしまう。

歴史の資料から曾祖父の過去を辿ると、日清戦争の頃から大陸への進出をこだわり続けていた事が窺える。しかし、曾祖父の夢は終生叶わなかった。だが、日本が歩んできたその後の歴史は曾祖父の描いた夢にすこしずつ近付いていった。そして今度の戦争へと繋がり、大勢の人間を死なせと思えばただ恐怖を感じてしまう。

そして、曾祖父の夢は今まさに、出発地点にたどり着いたばかりだ。

遠い道の先に何が在るかは分からない様に日本はこれからどの様に歩んで行くのかは分からない。

序章（後書き）

この作品を読んでいただきありがとうございます。
意見や感想などがありましたら遠慮なく送ってください。

第一章 軌跡（前書き）

明治維新により、日本は近代国家として激動の時代を歩み始め、それと共に歴史上に現れた『ある男』の軌跡を辿ります。

第一章 軌跡

江戸時代の末期、日本は重大な岐路に立たされていた。

欧米との開国である。

日本の政権を担う江戸幕府は、これまでロシアからの通商を拒否し異国船打払令をもって外国を退ける強気な姿勢を通していたが、アジアの大国である清が天保11年（1840）にイギリスとの戦争に敗れ、多額の賠償金を支払わされ香港を失った。これによって幕府は今までの外交政策を一変させ、次々と欧米諸国との間で通商条約や不平等条約を結んで行った。

この幕府の行動は国の将来を見据える重要な事であったが、朝廷の許可を得ずに行った事であり、この事で外国勢力排除のため過激なテロ活動を行う尊王攘夷が生まれた。

その尊王攘夷が特に活気だったのが長州藩である。

長州藩は、周防国と長門国を領国し、戦国時代に中国地方をおさめた大名毛利氏の直系が藩を治めた。幕末には二百もある藩のうち長州や薩摩、土佐、肥前の藩は自国の財政改革に成功し財政的、政治的発言権を高めた雄藩としての一面もあつた。また、地理的に国外の情報を幕府より早く得られる。

この長州藩で、嘉永三年（1850）に長門国阿武郡萩町の萩城下平安古に住む長州藩士の中級武士の家の七番目の末っ子として飛田源七郎と言う男が産まれた。

彼には兄が4人と姉が2人いたが四男は病弱であり、長男と次女は夭逝している。

源七郎が13歳の年の文久3年（1863）8月18日、長州藩は中川宮朝彦親王や薩摩藩・会津藩などの公武合体派により京都政界から追放される屈辱を受けた。

更に翌年の元治元年（1864）、京都に潜伏していた長州、土佐藩の尊王攘夷の特に過激派と呼ばれる一派は三条小橋の旅館池田屋で6月5日、会談中に京都守護職配下の新撰組に襲撃され主要人物が殺害される事件が発生する。

この事件により遂に堪忍袋の緒が切れた長州は、同年7月19日の日に軍勢を引き連れて上洛した。しかし、京都警備に当る会津、薩摩、大垣、桑名藩を相手に御所蛤御門周辺で合戦を行いボロ負けをして逃げ帰った。この戦闘で源七郎の三男も長州藩兵として従軍して討ち死にした。

長州の不幸は続いた。京都での合戦の後、英 仏 蘭 米の列強四国17隻から成る連合艦隊が馬関に襲来した。長州藩はこれまで攘夷政策により馬関海峡を封鎖していた事により経済的損失を被った英国の報復であった。ここでも長州は完膚なきまでに叩き潰される。

国内でも、先の合戦によって朝敵となり諸藩36国から成る討伐軍が組織され、総勢15万の大軍が長州に侵攻してきた。一方で、戦う余力のない長州藩内では、俗論派という保守派が藩の政権を握っており、迫り来る幕府に屈服した。

この時、14歳の源七郎は郷土長州の惨状を常に山の中や、遠い

場所から見ている。その都度、国の行く末を憂い幕府の弱腰と旧態依然の長州を呪ったのだ。そして翌年の元治2年（1865）、源七郎は高杉晋作が組織した奇兵隊に年齢を誤魔化して入隊した。

そして同年の12月、高杉晋作は反乱を起こし、瞬く間に藩内の俗論派を一掃して藩の政権を握った。

幕府は直ちに第二次長州征討を開始し、諸藩に出兵を煽った。しかし、薩摩は動かなかった。この時、坂本龍馬の仲介により、長州と薩摩は同盟を結んでいた。そのため、長州の諸隊に薩摩経由で最新鋭の兵器が供給され、長州軍の士気が高まり、西洋式の軍事鍛練を受けた諸隊は質をもって幕府軍に挑み、各戦線で撃退した。

そして慶応4年（1868）、薩長土肥から成る西南諸藩は倒幕を開始した。源七郎は、山県有朋と黒田清隆を指揮官とする北陸道鎮撫総督府の下で北越、会津、函館と各戦場を転戦していった。その都度、源七郎は良く戦った。一個小隊を率い幕府側の中隊規模の部隊を奇襲や釣り野伏せをもって蹴散らした。

また、会津では長州の部隊に軍規を一方的に無視をして、八月十八日政変、禁門の変、長州征討など数々の屈辱を受けた敵の土地で略奪や暴行が行われる中、源七郎率は自分の隊に徹底して軍規に服するよう厳命したが、軍規に違反した部下が数名出た。彼らを源七郎は斬り伏せた。

この事態は、上官である山県の耳に届き源七郎を呼び事の詳細を訪ねた。

源七郎は、軍規を守る兵士こそ強兵として国を守り国を強くするものだ。と問い、そのためには、どのような理由であろうと軍規を乱す者は私情を捨てて裁くものと言った。後に山県は、戦争での

源七郎の功績と彼の軍人としての素質を見抜き、重職に着かせるようになる。

明治維新後の源七郎は陸軍に入り、新政府の政策に反対する各地の土族反乱の鎮圧に従事していき、西南戦争の時には大佐となっていた。

第一章 軌跡（後書き）

御感想を御待ちしています。

第二章 齒車

飛田源七郎は希代の戦上手と言われたが彼も人である。一人の女性と恋に落ち、結婚して子供の父親になる。彼にの生涯で、この頃が一番幸福な時であつただろう。

しかし、彼の幸福を一個の齒車仕掛けの懐中時計に例えたとするならば、少しずつ中の齒車が狂い始めていた。

明治10年(1877)、西南戦争の最中に源七郎の妻は死んだ。その訃報を遠く離れた戦地で知った時、彼は人払いさせて天幕で一人泣き伏したと言う。しかし、その翌日、彼は何事も無かつたかのように部下達と振る舞い、戦鬪の指揮を執つた。

だが、明らかに彼の戦法は変わっていた。自ら小部隊を率いて交戦中の敵側後方に回り込み前方の味方と挟撃する『搦め手』を行う様になつたのだ。

古来から搦め手は危険な役目である。小規模の部隊のみで敵陣営に新入するため、見つかつてしまえばたちどころに集中攻撃を受け玉碎しかねない。

ところが、飛田源七郎の率いる搦め手の隠密侵入は高度であつた。確実に敵の虚を突き敵を挟撃を遂行する。

飛田の戦いぶりを見た味方の将校の間からは『まるで悪霊にでも取り憑かれているようだ』と言われた。しかし、彼の功績はこの戦争に参加した誰よりも大きかつたであろう。そう、彼の采配が西郷軍を崩したと言つても良かつた。

これにより、西南戦争は8月の初旬（史実では9月中旬）に終結した。

後世の歴史家達は、飛田源七郎について語る時、同じ言葉を口する。

『彼の人生の不幸は戦争の度に起きている』と。

確かに、幕末の混乱期には兄達を失い、明治維新の時には両親と死別し、西南戦争の時には妻を失った。

そして、日清戦争でも飛田源七郎の最愛の人が命を落としていく。

明治27年（1895）、飛田源七郎が陸軍中將の時、日清両国は朝鮮半島の主導権を巡り戦争が勃発した。

飛田は、第3師団長として出征する。しかし、彼らが朝鮮に上陸した頃には清国軍の士気は低迷しており、一度突けば散乱する『烏合の衆』であったため、飛田には目立った活躍は無かった。

陸軍の第2軍が旅順を陥落させた時であった。彼に人生の不幸が襲いかかってきたのは。

軍人となっていた飛田の一人息子が旅順攻略戦中に敵の砲弾を受けて戦死した。このとき彼は歩兵第1旅団隷下の歩兵第1連隊にいた。この第1旅団の指揮官が乃木希典であった。乃木が、旅順要塞

攻略主力に自分の旅団を使うよう師団長をおして軍司令官の大山巖に嘆願したのだった。

ともかく、長男戦死の報で飛田の受けた精神的な打撃は大きかった。これを重く見た第3師団が属する第1軍司令官の山県有朋は、飛田を帰国させ療養させた。代わりに第3師団長には桂太郎中将が着いた。

内地に帰還した飛田は、兄の所で療養する事となった。

この兄と言うのが源七郎の兄弟の次男で唯一の肉親であった。名を飛田貞直さだなおと言う。維新後、貞直は政治家を志し、先輩の同郷人、伊藤博文の右腕となっていた。

話しを戻す。あれ以来、源七郎は脱け殻の様に空っぽとなった。意識はあるものの、生気が無い。この時、誰もが彼の軍への現場復帰は出来ずに、このまま生涯を終えるであろうと考えていた。

しかし、源七郎の狂った『運命の歯車』と言う物は全く予測が出来ない動きをする。

必然的なのかもしれないが、源七郎に再び生気を沸かすきっかけが起きた。三国干渉である。

ロシアを中心とした列強三国は、日清戦争の下関講話条約で日本が獲得した遼東半島を『アジア平和』の名目に清国への返還を迫った。

日本の国力は、列強三国に比べれば発展途上に過ぎず、他の列強も日本の味方にはならなかった。戦争など出来る筈が無い。政府は手も足も出ないまま、三国の要求に屈する事になった。

国民は憤慨した。遼東半島を得るために、あの土地には、国家の血税が注がれ、大勢の兵士が死んだ。

以後、日本は対露に燃えた。官民を問わず『臥薪嘗胆』を合言葉に国力の増強と軍備拡張に沸いた。これと合わせた頃、源七郎に生氣が蘇って来た。

『飛田源七郎の軍復帰』これには誰もが驚かされた。また、軍部は彼が再び軍務に着けるか不安の声もあったが杞憂だった。連隊同士の模擬戦闘訓練では、あつと言つ間に常勝軍の地位を確立させた。

再び精神障害を患うのでは、と言つ声も少なからず出たが、これも杞憂の副産物であった。彼はもはや独り身であり、身内を失い悲しみに更ける事は無い。

ともかく、源七郎は対露戦に向けた独自の戦争、戦略案を練った。

特に、彼が一番力を入れたのが旅順であった。この頃、旅順はロシアが清国より租借しており、旅順港周辺の旧清国軍要塞区を新たに整備増強し、大要塞へと変貌させつつあった。

ロシアは、旅順を封鎖し、要塞の全容が皆無であったため、旧清国軍の旅順要塞を参考に策を講じ続けた。

そして、明治37年（1904）、日本はロシアに対し宣戦を布告し、国家の命運を賭けた先の見えない戦いをする事となる。それはまるで、針一本を武器にした小人が巨人の口に飛び込み腹の中で溶かされる前に致命傷を与える様なものであった。

飛田源七郎は第3軍司令官として出征する事になる。彼の活躍で史実と違う日露戦争を向かえる。だが、彼が戦うこの日露戦争は『何か』違っていた。

第二章 歯車（後書き）

御意見や感想がありましたら御遠慮なくよろしくお願いします。

第三章 日露戦争

日露戦争は、日本海軍の駆逐艦から成る水雷攻撃部隊の旅順港奇襲攻撃から始まる。

この日、ロシアでは聖母マリアの名に肖って、『マリア』と名のつく女性を祝うマリア祭であった。現場に責任があるとするならこれに原因がある。しかし、ロシア政府及び軍内でも、『日本からロシアに戦争を仕掛けてくる筈がない』と本気で考えており、日本政府の動向や日本軍の能力を真面目に窺っていなかった。

ロシアは完全油断をしていた。

旅順のロシア軍が日本海軍の奇襲に対して迎撃体制が整った頃には日本海軍駆逐隊は戦線を離脱していた。

この攻撃でロシア海軍旅順艦隊は戦艦二隻と巡洋艦一隻が大破する被害を受けた。

しかし、当の日本海軍にとって、旅順奇襲攻撃は失敗だった。当初は、この作戦で旅順艦隊を壊滅させる筈であったが、軍艦三隻の大破で幕を閉じた。ロシア軍は当然、今後旅順の厳重な警戒を二十四時間怠る事は無い。

ワンセットしかない日本艦隊は、旅順口を長期封鎖網を敷くしかなく、持久戦に持ち込まれた。何時解かれるかも分からない旅順口封鎖で水兵達は心身を疲労させ、艦艇は艦の底にカキが付着して行き最高速度を出すことが容易でなくらる。

この海軍の戦略失敗は、陸軍にも今後の戦略に影響を及ぼす事になる。

一方陸軍は、まず黒木為？大将率いる第一軍が朝鮮半島に上陸し、朝鮮のロシア軍を駆逐しつつ、中朝国境を流れる鴨緑江を渡り、ロシア支配下の満州に入った。

続いて、奥保鞏大将を司令官とした第二軍が遼東半島に上陸し、旅順と半島を結ぶ要所である金州を攻めた。対するロシア軍は、金州城 金州の都市 の北にある南山と言う山に野戦陣地を設けて第二軍を待ち受けた。

南山は、野戦築城とはいえ、防御戦術を得意とするロシア軍によって巧妙な要塞となっていた。

この南山で、第二軍は多大な被害を強いられた。坂の上に設置されたロシア軍の容赦ない機関銃の十字砲火を浴び、歩兵部隊が数メートル躍進するだけで数十から数百名の損害を出し、全滅した小隊や中隊があれば壊滅状態の大隊も出た。第二軍は砲兵による制圧射撃を何度も試みるも依然とロシア軍の陣地は健在で攻撃は衰えなかった。気付けば第二軍は、保有する砲弾の半分以上を使いきっており、これは、日清戦争全体で通した砲弾の使用量を雄に越えていた。

『大変な戦になった』司令部の人間全員が同じ事を考えていた。持久戦を訴える参謀の声もあったが、軍司令官の奥は即日陥落の可能性があると見きり、海軍に要求して南山西方の金州湾に砲艦を来援させ海から砲撃を行った。これにはロシア軍も虚を突かれ、この隙に第二軍の歩兵突撃は敵陣になだれ込み、南山陥落に成功させた。

だが、第二軍の損害は大きく、砲弾の殆んどを一日で使いきった。

参加兵力3万6千4百名のうち、死傷者は4387名にも及んだ。この損害を知った大本営参謀は、損害が一桁違うのではないかと驚いた。今度の戦争が日清戦争の比でない事を窺わせ、先の読めない戦況に誰もが不安を覚えた。

旅順方面の海軍でも一大事が起きた。旅順口封鎖中だった連合艦隊の主力戦艦六隻のうち、戦艦『八島』と『初瀬』がロシア軍の設置した機雷に触れて沈没した。ロシア海軍との艦隊決戦の前に二隻の主力艦を喪失する。この事態に危機感を募らせた海軍軍令部は陸軍に内陸から南下して旅順港砲撃による旅順艦隊撃滅を依頼した。海軍としては、旅順の封鎖を解き、艦隊を佐世保に帰還させて整備補給をしたのちに、来るであろうロシア本国艦隊　バルチック艦隊との対決に備えなければなかった。

陸軍は直に旅順攻略のため『第三軍』を編成した。だが問題ができた。軍司令官の選定である。この時、大陸北上用の『第四軍』が編成され、その軍司令官には野津道貫大将に決まった。しかし、第一、二、四軍の軍司令官は全て長州人では無かった。陸軍は創設時より、長州派閥が牛耳っていたため、その面子から第三軍司令官にはどうしても長州人を起用したかった。

司令官候補には二人の名前が挙がった。中將の乃木希典と飛田源七郎である。

乃木は、長い軍歴がある事を上げれば、司令官になる資格はある。しかし、日清戦争後長らく休職していたためロシアとの戦いについてこれるかが疑問視された。

飛田は、乃木と同様に長らく軍歴についており、対露戦と旅順の研究に没頭した。これを取れば飛田に軍配が上がるだろう。しかし、

彼は日清戦争中に精神障害を患い一時期一線を退いた。回復後は周りと距離を置くようになり、『変わり者』と密かに囁かれるようになっており、彼が司令官の任期中にまた精神障害の様な事が起こりうるのではないか。と言う声が上がった。

二人の長州人には各々の長所と短所を持ち合わせていた。最終決定を下したのは大本营参謀本部の参謀総長山県有朋元帥であり、彼は飛田を第三軍司令官に任命した。

山県は、明治維新の時から自分の下で戦う飛田を見てきており、飛田が独自で研究していた対露戦と旅順攻略作戦を高く買った。しかし、飛田の短所を山県としても目を閉じる事は出来ず、異例の処置として乃木中将を第三軍副司令官に任命した。

斯くして、飛田源七郎は第三軍司令官として旅順へと向かった。

この時、飛田は旅順攻略のため二十八糎砲センチを持ち出して来た。

この二十八糎砲は、日本国土に接近しようとする敵国の軍艦を撃退するために各主要都市沿岸に設置された沿岸砲である。

日本陸軍には野戦重砲を持っていなかった。前例のない近代要塞攻略には陸軍が持つ従来の野戦砲では力不足である。そう考えた飛田は、陸軍が持つ唯一の重砲、二十八糎砲に目をつけたのだ。

しかし、この二十八糎砲にも弱点があった。そもそも沿岸砲である。つまり、固定式の大砲であるため、移動手段など全く考慮されておらず、重量は26トンに及び、これを移動させ、設置し、外す。

この作業の行程には骨が折れる。

6月6日、大連に上陸した飛田等先発隊は後続の本隊を待たず行動を開始した。

開戦当初、第二軍指揮下にあつた東京第一師団は、南山の戦い後に金州に待機させ第三軍の隷下に加えた。この第一師団を先頭に旅順要塞に向け南下を進め、ロシア軍の各防御線を次々攻略して行き駒を進めた。

南下中、ロシア軍が敷いた防御線は南山たは比べものにならないくらい即席で簡素な防御陣地であつたため、易々と突破出来ていたが、旅順本要塞に近づくに連れて、多少なりとも損害が増えていった。

この事が飛田に大きな不安を与えた。防御線突破はあくまでも前哨戦。準備運動の様なものであつたが、7月13日（史実では8月15日）の時点で旅順の殆んど、残すは旅順要塞のみとなつた所で第三軍の出した損害は3千余名（史実では6千5百余名）であつた。

第三軍の参謀等は楽観者が多かつた。これまでの勢いで行けば旅順要塞は直ぐに落とせる。と、純粹に考えていた。しかし、彼等は決して無能であつた訳では無く、ただ実戦経験が乏しいだけであつた。

対象的に飛田と乃木は違つた。即日飛田は自ら偵察隊と数名の若い参謀等を伴い、旅順要塞の偵察に向かつた。

旅順要塞を見た飛田は直感が走つた。日清戦争の頃とは違つ。通常の強襲突撃で落とせる代物では無いと見た。各防御堡壘周辺に鉄

条網が張り巡らされていた。その先の丘には銃弾を防ぐ障害物は無い。丘の上にはまた鉄条網があり、その少し先にベトンで固められた銃座用の横穴が均等にいくつも開いている。上気のような行程の砲台も堡壘の後方に控えており、堡壘、砲台合わせて百十力所に及んだ。

この百十力所の各防御陣地をもって『旅順要塞』と言う。

旅順要塞の光景を見た飛田は、要塞堡壘の接近防御と堡壘を支援する砲台の連携関係を完璧と見た。

「これは要塞ではない、巨大な化け物の口の中だ。陥とす事は出来ない」

と、飛田は小声で呟くのを参謀の一人が耳にした。

あくまで飛田は、清国時代の旅順要塞を参考に攻略作戦を練っていたが、それが全て無意味となった。しかし、旅順攻略は急ぎの課題であった。北上中の第一、二、四軍は既にロシア陸軍との決戦予定地の遼陽に着々と集結しつつあり、8月下旬の会戦を予定していた。第三軍もこれに加わるため急ぎ北上しなければならなかった。

この時には既に、飛田の心中にあった旅順攻略の戦略が変わっていた。

司令部に戻った飛田は直に旅順口封鎖中の連合艦隊に連絡をとった。

『此方 連合艦隊 から見て旅順港全域を見渡せる高地は無いか？』

すると直ぐに返信が来た。

『二〇三高地』

二 三高地とは、その標高が203mある丘陵の事である。ロシア軍はこの高地を簡易な前進陣地築かれているのみで重要視していなかった。しかし二〇三高地からは旅順港全域を窺える。つまり、ここに砲撃用の観測所を設ければたちどころに旅順艦隊は砲的になる。

飛田は参謀に各師旅团长等を集め作戦を説明した。重要攻略目標を二〇三高地に定め、ここを速やかに占領する。高地占領後、旅順港砲撃用の観測所を設置する。これと同時に二〇三高地を射程に収める敵砲台に対する牽制射撃を行う。二〇三高地の観測所設置後、すでに占領下にある大孤山 ここからも旅順港を観測砲撃が出来た。において海軍陸戦重砲隊と同時砲撃を行う。ということであり、旅順本要塞の攻略の是非については一切言及しなかった。

「旅順本要塞の攻略については？」

参謀の一人が訪ねた。当然の質問である。

「必要無い。二 三高地を占領し、旅順艦隊を沈めれば良い。それが済めば一兵団程置いて、後は旅順要塞を竹の柵で囲んで置けばいい」

飛田はそれだけを言って、次に二 三高地維持における戦術に話しを移した。

一 昼夜十五分間隔で二 三高地に援護射撃を行いロシア軍の逆襲

に備えよ。

この命令にはその場にいた将校全員が度肝を脱いだ。

『二 三高地に向け援護射撃を行う』これを少々大袈裟に例えれば、土俵の上で、日本とロシアの力士が相撲をとっているとする。周りには相撲を見る観衆がいる。そして日本力士危うきとなれば観衆は一斉にロシア力士に向け全力で石を投げ、日本力士を助けようとする。だが全ての石がロシア力士にだけ当たるのは不可能でいくつかは日本力士にも当たる。

つまり、狭い二 三高地を巡り日露両軍が死闘を繰り広げるなら、その狭い死闘場の、しかもロシア軍だけに向けて援護射撃をする事など出来る筈は無く、流れ弾が友軍の頭上に降り注ぐ事になる。

参謀達は躊躇した。特に砲兵部長豊島陽蔵少将にとっては人事では無い。第三軍の砲兵指揮の全てが彼に任せられ、味方をも巻き込む砲撃を指揮するのだから。

「味方のいる場所（占領後の二〇三高地）に砲を撃つ事は出来ません！」

豊島は言った。すると飛田は彼の下まで近寄り、豊島の肩に軽く手を置いて言った。

「君は味方にも砲の弾が当たる事を心配しているのだな？」

飛田の問いに豊島は、はいっ！と力強く返事した。

「そこを上手くやれ」

それだけを言うと、飛田は豊島の肩に置いた手を下ろして元いた

場所に戻った。

「しかし、飛田司令……！」

豊島は食い付こうとしたが飛田が話しを始めた。

「成程、諸君がたじろぐのも無理も無い。敵味方混じれる狭い場所に砲撃を加えるのは前代未聞の無謀な作戦であろう。しかし、日本軍に出来なくてもロシア軍は平然とこなすぞ」

「我が軍はロシア軍と違います！」

言ったのは第三軍参謀長伊地知幸介少将だった。彼も砲兵出身であり豊島と同じように作戦の無謀差を分かっていた。

「友軍のいる中で砲撃をする事は無謀です！」

伊地知は豊島と同じ事を言った。しかしこれは、この場にいる将校全員の意見を代表して言ったのだった。

「この戦争は清国の時に比べ訳が違う！」

飛田は一喝をいれて黙らせた。

「諸君も知つての通り、ロシアの国土は広い。その領土を拡げて行くためにロシアは数百年間、相次ぐ敵を騙し戦い続けて来た。その分戦い方を心得ている。だが我が日本も軍隊もみな貧弱だ。その日本がロシアに勝つには、ロシアと同じやり方をして、彼等が出来ない事を此方が出来るようしなければならない。確かにこの作戦で味方の兵も犠牲になる。しかし、この作戦をもって一日二日で旅順艦隊を撃滅するにはこれしか無い！」

すると、飛田の目下に涙か溜つて来た。

「わしは、ロシアと言う『白熊』を倒すために血も涙も無い『鬼』

になった。諸君もわしに付いて行く『鬼』になつてくれ！」
そう言つて飛田は全員に向け頭を下げた。

現場最高司令官が涙を流し頭を下げてしまえば、誰も情が移らない訳が無い。場の主導権は飛田が掌握した。最早、将校等は有無も言えず、飛田の作戦が実行される事になった。

作戦は7月15日に行われた。まず、二〇三高地のある要塞東側に対し砲撃を開始した。ロシア側も反撃を開始し、激しい砲戦となった。これによりロシア軍の砲兵力の引きつけに成功し、作戦第二段階目の二〇三高地攻略に乗り出した。

二 三高地は、前記の通りロシア軍側から重要視されていなかった。守備兵およそ一個大隊しか置かれていない前哨陣地に向かつて日本軍の大軍が駆け上がり、瞬く間に高地占領に達した。そして直ぐに観測所を設置した。

この時、ロシア側からも日本軍の動きを捕えていたが、何故前哨陣地一つのために大兵力を投入したか、まだ分からなかった。

戦闘から数時間後、旅順艦隊の寄港する旅順港に不気味な轟音が鳴り響いた。戦場から響く砲音に近いが、この響く音は戦場の砲音よりも恐ろしく、恐怖心を攪る。まるで、何もかも吸い込んで行くかのようであった。

突然、水面に複数の水柱が上がり、艦艇から爆発が起きた。

日本軍の砲弾が、艦隊めがけて落ちて来た。従来の野戦砲ではな

く、重砲の二十八糎砲である。

ここにきて、ロシア軍は日本軍が二 三高地を奪った理由が初めて理解出来た。

ロシア軍は直ぐ様、二 三高地奪還のための兵力を投入した。

飛田の予想通り、二 三高地は決戦ならぬ『血戦場』となった。ロシア軍が高地上がるうとしても日本軍の銃弾を浴び、砲弾を浴びた。だが、二 三高地に居座る日本軍も同様である。敵味方の砲を受け被害が出た。

しかし、日本軍の旅順港砲撃は続いた。砲撃力は減っても、艦隊への命中率も上がり砲弾が降り続いた。既に日本軍の占領下にあった大孤山から観測砲撃が続けられていたからだ。

陸も海も死闘の場であった。だが、海上は更に悲惨であった。旅順艦隊の軍艦は、当時の主流である『堅艦』であった。そのため、いくら日本軍の砲撃を受けても沈む気配を見せなかった。しかし、船員にとっては地獄であった。艦の上であり、逃げ場など無い。ましてや山の向こうから砲撃してくる敵に撃ち返す術など無かった。

旅順艦隊の各艦艇の上面に設置されている艦橋やマスト、砲身などは見るも無惨に破壊され、至る所に砲撃による大穴が開き、人間は五体を吹き飛ばして消える者も少なく無かった。

日本軍の砲撃が続いた。艦隊は見る見るうちに、何処もかしくも破壊され、『生きた屍』ならぬ『動くスクラップ船』となった。

史実では、第三軍は旅順要塞との激しい死闘の末、二 三高地を奪い旅順艦隊に観測射撃を行った。しかし、戦後の調査の結果、第三軍の砲撃で旅順艦隊艦隊に致命傷を与えられず、ロシア兵自らが艦艇のキングストン弁を開いた事により自沈させたという。

だが、史実以上に砲弾を撃ち続けられようだろうか？

第三軍は旅順艦隊が沈むまで砲弾を撃ち込み続けた。

そして、遂に総排水量22万トンの旅順艦隊は旅順の海に沈んだ。

しかし、第三軍も多大な被害を被った。だが、休息の暇は無い。

第三軍は直ちに北上を開始した。

旅順には隷下の一個歩兵旅団と二個後備旅団から成る『兵団』を編成し警戒にあたらせた。その兵団長には乃木希典がなった。

第四章 疲弊

明治37年8月下旬

日露両軍の軍団は満州の都市遼陽で会戦を十日間繰り広げた末、日本軍は遼陽を制圧した。しかし、ロシア軍主力の殲滅には及ばなかった。

一方、内地では官民を問わず日本人は祖国の勝利のため機械の歯車の様に生きていた。国民は重税に耐え凌ぎ、政治家や外交官は国内外を渡り歩き情報収集を行いロシア情勢を探り、各国要人と会合して資金の調達等に明け暮れる日々である。

飛田源七郎の兄である貞直もロシアの情報を探るべく欧米を駆け巡った。その彼が日本へ帰国して伊藤博文の下に集めた情報を報告しに訪れた。

貞直と博文は、少年時代に長州の私塾である松下村塾での先輩後輩の関係であった。明治維新後、彼が政治家を志したのは伊藤の影響に因るものである。憲法制定にも飛田は伊藤の下で携わっていた。伊藤も飛田の政治才能を認めており、第二次伊藤内閣の際には貞直を入閣させている。

「…やはりロシアの同盟国のフランスは日露戦争の動向を懸念しています」

飛田は伊藤に書類の束を渡しながら言った。

フランスは、隣国はドイツ帝国を1870年の普仏戦争以来の仮想敵国としていた。フランスは強大な陸軍を持つロシアと同盟を結ぶ事で東西からドイツを牽制する態勢で自国の安全保障を保ってきた。

ていた。しかし、日露戦争によってロシア軍はヨーロッパ方面の陸軍も極東に派遣する計画を立てたため、フランスの安全保障に綻びが出来てしまい日露戦争の推移を注視していた。

「ご苦労だった飛田さん」

伊藤は返事を返したが、顔色は決して良くはなかった。

伊藤博文は元々百姓の長男であったが、下級武士の養子となり松下私塾に入り、高杉晋作の下で才覚を表し明治維新後の日本の政權運営を担う事になる。

伊藤の政治家としての外交姿勢は常に外国を過剰なまでに高く見て、日本の能力を低く見ていた。幼少、青年期には下級武士の子として貧しい生活を送っているため、現在における日本国民の生活の貧窮差を良く分かった。また、海外留学の経験もあり列国の国力と軍力は日本に到底及ぶ事は無いと結論付けていた。

そのため、日清戦争の時も清国との戦争回避を主張し続け、今回の日露戦争の際も日露開戦前には直接ロシアに行き『日露協商家案』を持ちかけるほどであった。余談だが、伊藤のロシア訪問していた頃、日本とイギリスは同盟締結の交渉中だったため、イギリス側は伊藤の訪露を『日英同盟締結失敗の滑り止め』の可能性があると指摘した。日英同盟案が白紙化されれば、日本は

「伊藤さんはお疲れのようですね」

飛田は言った。

「この頃、良く眠れていない」

「ですが戦争は日本が勝っています」

「気休めなど言つなよ。昨日や今日の戦に勝つても戦争は終わらんし、明日は勝てるかは分からんよ」

伊藤は苦笑しながら言う。

「しかし私の弟や倅達、兵隊さんは戦地で頑張つて戦つちよりますから全滅する程の負け戦はありますまい」

飛田はそう言いながら近くの椅子に腰を下ろし、自分膝を叩いた。彼は片足が不自由であった。そのため、彼は維新の際に軍に入る事が出来ず政治家の道を進んだのである。

「今私達政治家は、迷つたり考えたりはする暇はありません。日本軍が負けないうちに戦争を終わらせるため尽力しなければいけません」

伊藤は煙草を取り出して火をつけた。

「しかし、嫌な予感がするのだ」

「嫌な予感？」

飛田は伊藤の言葉を小さく呟いた。

「そうだ。わしの予感は何かと当たりやすい」

伊藤は、煙草を灰皿に捨てて書類の束をまとめた。

満州の戦局は日本軍が優勢を保っていたが油断を許さぬ状態が続いている。

十月、遼陽北方の沙河でロシア軍の反攻があつたが退く事に成功した。

翌年の一月にも再度ロシア軍の攻勢が行われたが、これも撃退に成功した。しかし、この二つの両会戦は日本軍がロシア軍と紙一重の差で勝っている。

日本軍の勝利の背後には、満州のロシア陸軍を束ねるのクロパトキン総司令官があつた。

戦闘前日、ロシア本国から戦局打開のため派遣されたグリツペリンベルグ大将が派遣された。グリツペリンベルグは日本軍への攻勢を主張したが、クロパトキンは今までの戦いの経験から『一撃必殺』のため現段階で防戦を主張したが、結局攻勢に転じる事になった。

一度目の沙河での戦いは、クロパトキンの指揮の下で行われた。日本軍は予想以上の防戦したため苦戦を強いられる。更には、日本軍の逆襲に合い戦況が膠着状態になり、戦力が優勢にも関わらず退却を命じた。これはクロパトキンの度量が日本軍に脅えて負けてしまったといつていいだろう。

二度目の戦いは、グリツペリンベルグが自ら前線に乗り出し、直接指揮する部隊が日本軍を窮地の淵まで追い込んでしまった。このため、もしグリツペリンベルグが日本軍を撃破する事に成功したらクロパトキンの今までの対日戦略が無策だったという烙印が押される上に、グリツペリンベルグが自分以上の地位に立つ事を恐れたクロパトキンは、有りもしない日本軍の反撃を理由に自分の部隊を後退させてしまったため、前線の部隊を指揮していたグリツペリンベルグは包囲殲滅の可能性を危惧し退却を開始した。

日本軍はロシア軍退却によって辛くも危機を脱した。その後、日

露両軍は次の戦いに備えて補給に専念をした。しかし、日本軍にはこれ以上の大規模戦闘は困難であった。

現地軍指令部である日本の満州軍は、奉天を最終攻略目標と定めた。一方、ロシア側も再度日本軍への攻勢を模索していた。グリツペリンベルグは、先の戦い後でクロパトキンとの対立の末、ロシア本国に帰国した。そのためクロパトキンは、日本軍の防御の薄い最左翼 日本軍の視点では右翼 への攻撃を計画していた。しかし、先手を打ったのは日本軍である。

戦いは二月下旬から三月の初旬の十八日間行われたが、ロシア軍が奉天を放棄して長春への撤退で幕を閉じた。

日露両軍は痛み分けに終わったが、ロシア軍の損害はシベリア鉄道での補給で数カ月で回復出来る。しかし、日本軍は乏しく、悪路で長い補給路のため、再度決戦を挑む体制を整えるためには半年はかかる。日本陸軍は戦術において、奉天の占領という戦果を挙げたが、ロシア軍の殲滅には失敗する。

最早、陸軍には戦争を終わらせるだけの決戦を行うだけの戦力を失ない、日露講和の機会を無くした。

残るは海上での連合艦隊とロシア本国艦隊ことバルチック艦隊との艦隊決戦であった。

第五章 転進

明治38年5月27日

日本の連合艦隊とロシアのバルチック艦隊が対馬海峡東水道で砲火を交わした。

バルチック艦隊は戦艦8隻、海防戦艦3隻、巡洋艦9隻を有する50隻の大艦隊であったが、速度の遅い旧式艦や補助艦も含まれていた。また、半年かけて地球を半周する航海行つたため、兵員の士気と練度は高くない。さらに、ロシアの友好国の港で満足のいく整備補給を受けられず、艦艇にはカキが付着して速度や艦隊運動に支障をきたしていた。

対する連合艦隊は、陸軍第3軍の旅順攻略以降、将兵は艦隊運動や砲撃の質を磨き今日の決戦に備え鍛練を積み重ねてきたいた。そして、連合艦隊作戦参謀の秋山真之中佐が立案した『丁字戦法』をこの海戦でバルチック艦隊に用いた。

後に『日本海海戦』と呼ばれる事になるこの海戦は、日本海軍の勝利となる。

バルチック艦隊そのものは、多くの艦と共に日本海の海底に消えていき、ウラジオストクに辿り着いたのは、巡洋艦と駆逐艦の2隻ずつであった。日本海軍の損害は夜間襲撃に出撃した駆逐艦と水雷艇の5隻の損失のみ。ロシア海軍は、戦力と言える艦隊は黒海艦隊を除いて壊滅した。

ロシアの戦争指導者達は、『バルチック艦隊が思い上がった日本に鉄槌を下すであろう』と豪語していたが、相次ぐ敗戦と1905

年の1月22日に起きた『血の日曜日事件』を境にした国民の皇帝への離心による反政府運動が重なり、これ以上の戦争継続は困難を極めていた。

だが、日本も同様である。国家予算は破綻寸前で、日本海周辺の制海権確保しても満州の陸軍では士官不足と砲弾の備蓄量から、ロシア陸軍を殲滅する能力がなく、戦線の維持だけで手一杯である。

しかし、戦局は日本に傾いていた。

6月9日、アメリカ大統領セオドア・ルーズベルトは、日露両国の仲介に入り講和勧告をした。日露両政府は、上記の国内事情から勧告を受諾した。

戦争は終結に向かおうとしてはいた。しかし、満州の最前線ではまだ休戦状態ではなく、雨期のため大規模な戦闘ができない状態だった。ロシア陸軍の戦力は日本陸軍を凌駕していた。

この時、満州のロシア軍司令部は、長春南方の公主嶺という都市にあり、最高司令官はクロパトキン大将から第1軍司令官ニコライ・リネウイッチ大将へと変わっていた。

リネウイッチは、『シベリアの狼』の異名を持ち、奉天会戦以降、日本軍への逆襲の機会をうかがっていた。しかし、ロシア本国は日本との講和交渉の準備を進めていることを知って憤った。

海軍は負けても、今の満州にいる陸軍戦力だけでも十分日本軍を破ることができるのに何故日本と講和をするのか。本国政府は満州での陸軍の実情を知っていないのだろう。

しかし、今は雨期であり両軍は大軍を動かすことはできず小規模な戦闘を繰り返す日々を過ごしていた。だが、この雨期を逆手にとれば日本軍に攻撃を加える絶好の機会ではないか？日本軍はこの雨期でロシア軍は軍事行動を起こさないと考えているのではないか？

雨季の中の攻勢。確かに道路網などのインフラ整備が行き届いていない満州では、路面が雨によって悪路となり、大砲などの重武装を運ぶのは困難を極める。また、雨によって兵士の体力を消耗させる。しかし、それでも兵力は日本軍の倍はあった。さらに日本軍は奉天の会戦以降、兵力は15万強程しかなく、砲弾の量も残り少なく、補給線も伸びきっている等、ロシア軍以上に苦境にある。

リネウィッチは決断した。

日本軍で、ロシア軍の大規模な軍事行動を最初に察知したのは、第三軍に所属する騎兵第1旅団と騎兵第2旅団から成り、少将秋山好古が束ねる秋山騎兵団の遠距離偵察をしていた斥候部隊である。

斥候が得た情報は、直に満州軍司令部に送られた。だが、そのような情報は外部から届いていない。だいたい、この雨季に大軍を動かすのは無謀ではいか。と、司令参謀達は騎兵の報告を鵜呑みにしてしまった。

だが、満州軍司令部が騎兵の斥候報告を鵜呑みにしたのは、今に始まった事ではない。

明治38（1905）年1月、欧露からの部隊が続々と満州に移動してきている。という情報が満州軍司令部に届いた。

また、前線でもロシア軍の行動が活発になってきており、捕虜から得た情報で近く攻勢に出る。との事実も出た。しかし、満州軍司令部は、1月の極寒の時期にロシア軍が攻勢に出る筈が無い。と、結論づけてしまった。兵家の常道上、春に攻勢に転じて来ると司令部は考えていたのだ。

この時、司令部の首脳らは、フランスのナポレオンがロシア軍の冬季攻勢によって敗北をした事実を脳裏に思い浮かんだ者が一人もいなかった。

そして1月25日、ロシア軍10万が大攻勢を仕掛けて来た。防衛体勢の整わない日本軍を窮地に追い込むも、ロシア軍の内部事情でこの攻勢は失敗に終わった。しかし、この本格的な攻勢を満州軍司令部は最後まで威力偵察だと言い張り続けたのだった。そして今また、司令部の悪い癖が出たのだ。

だが、仮に司令部参謀が騎兵の報告を聞き入れたとしても、今の日本軍にはロシア軍の攻勢を押し返す戦力が十分に揃わない状態であった。

6月の中旬、ロシア軍は攻勢が始まった。日本軍の小枝の様な脆くて広大な防衛線にロシア軍の砲弾が降り注いだ。

特にロシア軍が戦力を集中させたのは、日本軍の左翼を守る第三軍であった。第三軍は、遼陽会戦以来からロシア軍にとっては目の上のたんこぶであった。

ロシア軍の満州第2軍所属の4個軍団（『軍団』は日本軍の『軍』に相当する）が襲いかかったが、第三軍はロシア軍の期待を裏切る事なく戦かった。

しかし、日本軍の戦力も限界に近付いて来た。各戦線は縮小されて戦力の集中が成されていった。

満州軍司令部は、次々と発生する事態の対処に追われていた。だが、彼等がどうしようしようと、ロシア軍の攻勢そのものを阻止させる事は出来なかった。

この満州軍の総参謀を務めているのが、兒玉源太郎大将である。日露戦争開戦以来、彼の頭脳一つで弱い日本軍をロシア軍と互角以上の戦いに持ち込んで行ったといっても過言ではない。その兒玉が、満州軍総司令官である大山巖元帥のいる指揮官室に入った。

室内にいた大山は猫に餌を与えていた。

「おお、兒玉さあ。近頃こん猫たちが自分で餌を食べんからこまいます」

と、大山はにこやかに言った。まるで戦争が他人事のようにであった。しかし、この大山の振る舞いに兒玉の緊張は多少和らいだ。

「いけん（どう）ですか。戦争のほうは？」

大山は兒玉に椅子にかけるよう勧めながら現状の事を尋ねた。

「よい状態ではございません」

大山は猫を従兵に預けて、椅子に掛けた。兎玉は改めて今後の方針を話し出した。

「閣下、我が軍は今後部隊の再編を図るため部隊の『転進』を行います」

「転進？つまい逃げっこっじあなか？」

「そうです。逃げるのです」

兎玉は言った。今、日本軍が全滅してしまえば満州の支配権だけでなく朝鮮までもロシアの手中に入ってしまう。しかし、停戦の日まで日本軍の主力を維持できるのならば、朝鮮の独立は維持できる筈と考えた。そもそも日露戦争は、ロシアの南下政策から朝鮮半島の独立を保とうとする日本とロシアの対立から発展したものであり、日本の最終目標は朝鮮の独立であった。

「…」

大山はしばらく考えた。彼も一人の軍人としてロシア軍の実力を知り、日本軍の現状を知っていた。そして、

「わかいもした。では、殿の部隊は？」

この問いに兎玉は第三軍の名を挙げた。現在の戦況は左翼の第三軍に敵の主力が殺到しつつあるが、中央、右翼の軍はどうかロシア軍を退いた。このすきに第三軍以外の軍を後退させる計画であった。

「では、おいも第三軍に行ってもそかと、大山は言った。」

日露開戦後、現地軍司令部である満州軍司令部が創設された際大山は、戦闘計画はすべて児玉源太郎に任せ、自身は日本軍が敗れた時に陣頭指揮を執るといふ事を決めていたからだ。

こうして日本軍の転進作戦支援のため第三軍は過酷な戦闘の日々が始まった。

第六章 歩卒

第三軍が満州軍の転進支援のため、戦闘を行うにあたり4個の歩兵旅団が第三軍の指揮下に入った。また、第三軍の編成も再編された。

戦闘序列は以下の通りである。

- 第1師団
- 第7師団
- 第9師団
- 騎兵第1旅団
- 野戦砲兵第2旅団
- 歩兵第15旅団
- 歩兵第16旅団
- 歩兵第20旅団
- 歩兵第24旅団

元々、第三軍の指揮下にあった三個師団と砲兵旅団に加えて新発田の歩兵第15旅団、秋田の歩兵第16旅団、福知山の歩兵第20旅団、久留米の歩兵第24旅団が新たに指揮下に加わった。これは軍隷下の、戦闘能力的に現役兵に劣る後備兵部隊と入れ替えをするためでもあった。また、秋山騎兵団は騎兵第二旅団が騎兵団から離脱して満州軍の指揮下に入った。これは日本軍の後方攪乱のためロシア軍の放った騎兵部隊への対抗のためである。

大山巖元帥も第三軍司令部と合流した。

真剣な顔付き。ではなく、のんびりとした表情でいて、とても戦

場に赴いている様には感じられなかった。この時、出迎えた飛田源七郎は改めて大山の器の大きさを実感したのだった。

とは言え、飛田が指揮してきた第三軍に自分より階級の高い元帥の大山が来たため、部隊の運用をどうするかに着いて協議をする事にした。

第三軍の主要参謀達は戦闘の対応に追われていたため、飛田と大山の二人だけで話しが行われた。しかし、直ぐに話しは済んだ。

「外では戦闘が続き、ロシア軍が押し寄せておいもす。今は今後の事で時間をかけて話をしじあ暇はあいもはん。ここは一つ、第三軍はいますい通いおはんにお任せしもんで」

と、大山は第三軍の指揮権をこれまで通り飛田に任せた。

「では閣下、私から一つお願いがあります」
次に飛田は言った。

「戦況は著しくありません。いざとなれば私自身部隊を率いて敵に斬り込むつもりです。その時は、閣下が軍の指揮をしてください」

「…わかいもした。じあんどん飛田さあ、命あつての物種。兵隊の命もおはんの命も粗末にしてはいけません」

大山はそれだけを言った。部隊を指揮しての襲撃自体は反対しなかった。しかし、飛田が戦死をすれば第三軍、日本軍全体の士気が急落するのは間違いない。海外のメディアが知ればいち早く世界に報道してしまう。そうなれば満州のロシア優勢を後押ししてしまうことにもなる。

第三軍は戦術は、迫りくるロシア軍に対して拠点防衛に徹し、敵

を退けては後方へ下がるロシアの伝統的な後退戦術を用いることにした。また、騎兵第1旅団は隷下の2個騎兵連隊うち1個をロシア騎兵迎撃にまわし、もう1個の騎兵連隊をロシア軍の後方攪乱任務にまわした。

歩兵第15旅団は、仙台の第2師団の師団内旅団の1つである。新潟県出身者が主体で、新発田の歩兵第16連隊と村松の歩兵第30連隊の二つの歩兵連隊を隷下にもつ。

歩兵第16連隊に笹野太吉さしのたきちという歩兵上等兵がいた。

彼は戦争の始まった明治37年の1月に入営し、第一軍の鴨緑江会戦以来の古参兵で開戦以来の出来事をすべて日記に書き残していた。

『(明治38年)6月18日・この日、塹壕の中で露助への警備で暇を持て余していた時、突如敵戒令が出た。晩、露助の大逆襲が噂をされた』

『6月20日・我が中隊に露助来襲の報が届き迎撃態勢が敷かれた。そして昼頃、何処からともなく砲音が聞こえてきて、轟音と共に地響きが鳴った。敵の砲撃だった。暫く砲撃が続いたが、今度は敵歩兵が突撃を開始してきた。我が中隊も何糞と塹壕を飛び出して逆襲を行い乱戦となった。私は自分より大柄の露助と一騎打ちとなることになった。しかし、大柄とは裏腹に、相手の露助はこちらから先に突いた銃剣が胸に刺さって倒れた。倒した露助の着物を見ると汚れが余りなく、戦場に来たばかりの新参者だと分かった。私とさつきの露助との対決が終わった時には敵は逃げかえっていた。だが

我が中隊からも何人が死人が出た』

その後、22日までロシア軍との塹壕戦がつづられている。

『6月23日 - 我が中隊に移動令が出されて今までいた壕を後にした。耳にした話では我が16連隊の属する旅団が別の軍の指揮下に入るらしいという』

この頃の戦闘では第一軍がロシア軍の押し返しに成功しており、軍の転進が始まった。

『6月25日 - 昼夜を徹して行軍をした。途中小休止が幾度かあったが連日の雨のせいで地面がベチャベチャになっていた。それでも皆、尻を下して体を休めた。この時には移動先が第三軍らしいとの話を聞いた。その第三軍はなんでも露助の大軍を食い止める殿をやるらしく、この話が本当なら16連隊はとんだ外れクジを引いたことになる』

『6月26日 - 明け方、分隊長殿に叩き起こされて目が覚めた。どうやら第三軍と合流すると同時に戦闘を開始するらしい。朝方の行軍中、連隊の先頭を進んでいた部隊が露助の砲撃を受けた。部隊が反撃をする頃には敵は姿を消していた。敵の攻撃を警戒しつつ、我が中隊は攻撃を受けた場所を進み、仏様になつた味方に手を合わせた。夕暮れ頃、16連隊は第三軍が用意した防衛陣地に着いた。しかし、敵の攻撃は無かつた』

『6月27日 昨日、連隊に機関銃と大砲が配備された。午前10時を過ぎ頃、我が陣地が露助の砲撃を受けた。暫く続いた砲撃の後、敵部隊の突撃が始まった。だが、機関銃の猛烈な攻撃により、敵の多くが倒れた。敵は我が陣地に乗り込む事なく退いた。その後、

敵の砲撃が行われ、夕暮れまで続いた。その晩、我が連隊は後方に下がるため移動』

以後、6月の末まで上記の様な防御戦を繰り返した。

そして7月1日、第三軍の後退に伴い、奉天から北の都市である鉄嶺^{てつれい}まで歩兵第16連隊は移動する事になる。

この6月末の戦いは、後に戦場となった地名を取って『四平街^{しへいがい}の戦い』と呼ばれる。

物量で圧倒するロシア軍の攻勢を第三軍が火力と防御戦闘で上手く撃退した。そのため、ロシア軍の死傷者が第三軍より上回った。

また、雨季と大軍団が祟り、退却する第三軍に追撃が思うように進まず、逆に突出した軽装備部隊が逆襲にあう場面も多々あった。

しかし、多勢に無勢の第三軍も、連日の不眠不休での戦闘と移動と襲撃で多くの将兵が倒れ、鉄嶺に主力が着いた時には戦力が4分の1まで減っていた。

第七章 鉄嶺会戦

四平街の戦いでロシア軍は出鼻をくじかれる形となったが、総司令官のリネウイッチは追撃を強行させた。この時、後退する日本軍の最後尾を守る第三軍は四万五千名の兵力を抱えていたが、ロシア軍はなおも三十万の大軍団である。

第三軍は、隷下の工兵部隊を用いて鉄嶺に簡易な防御陣地を構成してロシア軍の来襲を待ち構えた。

古来から攻める軍は、守る軍に対して三倍の兵力で攻めなければならぬ。いわゆる『攻撃三倍の法則』というものであるが、守る第三軍と攻めるロシア軍の戦力差は約六倍である。

7月6日

追撃してきたロシア軍が攻撃を行った。日露戦争の地上戦において後に『鉄嶺会戦』と呼ばれる戦いの始まりである。

ロシア軍の先陣はクロパトキン大将率いる満州第1軍の第1軍団とシベリア第2軍団であった。二つの軍団は第三軍を取り囲むように軍を展開しようとしたが鉄嶺の北西に遼河、北東に柴河の河があり、河を渡る橋は全て日本軍に破壊されていた。また、連日の雨期によつて流れも激しくなっている。それでも強行して渡河をしようとする部隊に対岸から日本軍が砲撃を加えられ、ロシア軍は被害を受けた。しかし、日本軍の砲撃は長くは続かなかった。砲弾の数が貧弱なため、渡河するロシア軍部隊の全てを撃滅することはできず、渡河部隊を援護するために撃たれるロシア砲兵の前には成す術が無かった。

7月10日

第三軍は鉄嶺からの撤退を始め、次の防御線である紅光村まで下がった。その際、一時的に第三軍の指揮を大山巖に任せ、飛田源七郎は歩兵第15旅団を指揮してロシア軍への夜襲攻撃を行う。

歩兵第15旅団は元々仙台の第2師団隷下の歩兵旅団である。その第2師団は昨年の遼陽の会戦で師団長の西島助義中將が独断で弓張嶺を守るロシア軍に前代未聞の師団規模での夜襲を行い撃破した。そのため夜襲経験のある歩兵第15旅団が選ばれた。

歩兵第16連隊の笹野太吉上等兵の日記にはこう書いてある。

『7月10日 - 夜間から翌日の黎明にかけて、我が隊の所属する旅団は夜隠に乗じて鉄嶺の露助に夜襲をかけた。我々は明かりをつけず夜に慣れた目を頼りに夜道を進んだ。暗闇のため隊列がひどく乱れるも敵陣営に接近した。そして隊長の合図とともに無音で敵陣に襲いかかった。聞こえるのは露助の悲鳴と銃声のみであった。私は露助に積年の恨みを晴らさんとするように銃剣で突き刺し周った。夜襲はほんの数十分だったがロシア軍は大壊乱した。その後、我が旅団は負傷者を担ぎながら紅光村まで走って退却をする』

この夜襲で鉄嶺を占領していたロシア軍は大混乱し、多くの物資を喪失した。しかし、歩兵第15旅団の犠牲も大きかった。二つの歩兵連隊を合わせて約三千五百名の兵士のうち約千六百名が命を落とした。

7月11日

第三軍は紅光村を放棄し、翌12日までに南の三台子村まで後退した。將兵の殆どは昼夜を問はず不眠不休で動いていた。軍司令部將校も同様である。

この第三軍後退の援護をしたのが秋山好古少将指揮する騎兵第一旅団であった。ロシアの追撃部隊を撃退しながら、騎兵の機動力を活かして小規模な奇襲攻撃を行いロシア兵を翻弄させた。

7月13日

体制を立て直したロシア軍が三台子村の第三軍に総攻撃を加えた。しかし、第三軍のロシア流陣地防御の前に犠牲者が続出した。一つの前哨陣地を奪取したか思えば、陣地内に仕掛けられた爆薬が炸裂する。歩兵突撃を行うも、日本軍の機関銃の斉射の前に屍の山を作りながら弾幕を掻い潜り日本軍の陣地に入り込む手前で落とし穴にハマり、底に埋め込まれた鹿砦ろくさいの串刺しとなる。

第三軍の退路の遮断を図るため、独断で挺身行動したシベリア第三軍団隷下のシベリア騎兵師団が歩兵第20旅団の伏撃を受けた。師団長のフォンバウムガリテン少将が戦死し、師団隷下の4個騎兵連隊のうち3個連隊が壊滅した。

夜が来て、ロシア軍の攻勢は止んだ。総攻撃は失敗した。一日の戦いで、一つの騎兵師団と三つの歩兵連隊が壊滅し、戦闘序列から外された。

最前線のロシア兵は狼狽し続けた。一連の戦いで日本兵の体力は限界に達している筈が、撤退から交戦、仕掛け罠、夜襲の手際に乱れが無い。物量で圧倒するロシア兵は犠牲者の数を増やす一方のため士気は著しく低かった。

満州のロシア軍を掌握する軍司令部でも問題があった。そもそも

日露両政府は講和に向けた準備を進める中で、総司令官リネウイチは独断で日本軍に攻撃を加えたのである。結果、日本軍の撤退という戦果を出し、開戦以来初の勝ち星を挙げたがロシア政府にとつては有名無実であった。

ロシア国内では貴族と平民の身分と貧富格差、日露戦争による重税と敗戦で国民の不満は爆発し、各地で反政府運動が起きた。そのためロシア政府は日本との講和に踏み切った。だが、リネウイチはこれを無視して戦争を継続したため、反政府運動が継続されていた。

このまま反政府運動が続けば政府は潰されてしまう。この考えがロシア政府内の人間達の思考を占めてしまった。満州の現状を詳しく知ろうとせず、反政府運動の鎮圧を最優先としたため、満州のロシア軍に十分な補給が行われなかった。

そのため、満州のロシア軍の軍、軍団司令官達の間には後顧の憂いが出た。

ロシア軍も他の列国の軍隊と同様に『兵站』を重視している。満州において日本陸軍を上回る戦力を持っているとはいえ、一度の会戦で膨大な弾薬を消費する。四平街の戦いから鉄嶺会戦まで多くの弾薬を消費した。

十分な補給が行われないで日本軍と決戦はできるのか。満州軍第1軍司令官クロパトキンは日本軍の能力を過少評価せず、国内情勢を考え攻勢は消極的であった。満州軍第2軍司令官アレクサンドル・カウリバルス大將は、長く続く日本軍との戦いで心身が疲れ、柔軟な判断が出来ず慎重であった。満州軍第3軍司令官ビリデルリング大將も同様である。

ロシアの政府と軍、どちらも波長が合わず、軍においては上から下にかけて統率が上手く執られていなかった。

7月17日 アメリカ ニューヨーク

ロングアイランドと言う、ニューヨークの南東部に位置する陸地から程近い島がある。

アメリカ合衆国第26代大統領のセオドア・ルーズベルトはロングアイランドのオイスターベイに別荘を持っており、一人の日本人が来るのを待っていた。

暫くするうちに、目的の人物が現れた。

「金子、良く来てくれた」

と、ルーズベルトは自ら庭に出て訪問者を出迎えた。

「いやいや、しかし何用でここに呼んだんですか？」

訪問者は尋ねた。

人物の名は金子堅太郎と言う。彼は嘉永六（1853）年に筑前国で生まれ、維新後の明治4（1871）年、渡米してハーバード大学に入学した。ルーズベルトとは、ハーバード時代の同窓の仲である。そのため、日露戦争の講和の仲介役をアメリカにさせるよう、金子は日本から派遣されていた。

「これから友人達とパーティを開こうと思ってね。君も呼んだのだよ」

「パーティですか？」

「出席者はメディアや金融などで影響力の強い人物ばかりだ」

このルーズベルトの言葉に金子は反応した。彼は渡米し、ルーズベルトに日露仲介役を嘆願した後、アメリカ中を周り各界有力者達と会い、日露戦争における日本の正当性を主張し続けた。これは戦争の外貨獲得もある。アメリカは君主のいない共和制国家である。そのためアメリカを日本の味方にするには、アメリカ国内の世論の支持を得る必要があった。

もう一つは、アメリカ国内のロシア勢力との対抗であった。ロシア支持勢力は新聞社を買収して情報を操作してアメリカ国民の同情を得ようとしていた。それに対し金子は一人でアメリカ中を回り歩き支持者を集めていた。

「ありがたいかぎりです」

「それからもう一つ君に告げておきたいことがあるんだ」
と、ルーズベルトは言った。

内容は日露講和の件であった。ロシアはアメリカの講和勧告を受諾したが、満州の戦局で講和交渉を延期にさせていた。そのロシアを講和のテーブルに引きずり込むには再び満州で日露両軍の大会戦を演じ、勝てなくてもロシアの勢いを挫く必要がある事を告げた。

第八章 停戦

7月24日 満州

第三軍は奉天に入った。13日の戦いの後、ロシア軍と第三軍は二回の攻防を繰り返した。しかし、第三軍はロシア軍の重圧を防ぎ抜き、逆襲に転じて包囲網を突破する事が出来た。

常に第三軍とロシア軍との兵力差は六倍であり、砲兵力は雲泥の差であった。この圧倒的な戦力差の中、飛田源七郎は頭一つでロシア軍と戦い、将兵は気力を尽くして戦った。そして、第三軍全将兵はロシア軍が攻撃を終わらせるまで戦い続けた。いわば、ロシア軍と根比べをしていたと言えるよう。

奉天には、日本軍の一個師団と内地で新たに臨時編成された第13師団、第15師団の3個師団があり、第三軍の指揮下に置かれた。

7月25日

第三軍は奉天から南の遼陽に向かった。その間、想定されていたロシア軍の追撃がなかった。ロシア軍内でも第三軍の追撃案があったが、四平街から鉄嶺での第三軍との戦闘で少くない消耗を負い、補給の乏しい状態で追撃戦をするのは望ましくないという意見が占めた。そのため、部隊の再編を行い日本軍主力のいる遼陽での決戦に全力を挙げて撃滅させる事に決まった。

日本軍の主力は遼陽郊外東南部の山岳地帯でロシア軍の迎撃態勢を敷いていた。だが、ロシア軍の撃滅を可能とするだけの戦力は皆無であり、ロシア軍を山岳戦に持ち込み日露両政府の停戦合意の日まで持久戦を行うのが狙いである。

7月30日

遼陽に入った第三軍は、主力部隊と合流した。そして、休すむ間もなく新たな配置場所である山岳地帯まで移動する事になった。

この時の日本軍の総兵力は20万強である。しかし、兵士全体の三分の一は召集された予備役の老兵や後備兵であり、小隊長級の士官においても予備役や十分な教育を受けていない新人などであり、戦局に応じた判断や行動力は鈍い。砲火力の面でも十分とはいえず、戦闘中に弾薬が底を尽きる恐れがあった。だが、日本軍がロシア軍と戦うにおいて救いとなる要素を挙げるならば、戦場が山岳地帯であり、日本軍が防御側ある。

平野での戦闘となれば単純に戦力の優劣で勝敗は決する。しかし、山岳戦ともなれば部隊の身を隠す障害物が多々あり、地形によつて砲兵の火力支援が行えない事もある。登り上がる兵士の体力をも奪う。複数の山々を攻略せねばならず、戦力の優劣より作戦指導者の知恵が勝敗を分ける。また、日本軍は20万の兵力を抱えての防戦であり、30万を有するロシア軍に対して『攻撃三倍の法則』から見て対抗出来る公算があつた。

8月13日

遼陽に入ったロシア軍は、翌14日に攻撃陣が日本軍の構える遼陽東南部に布陣した。

8月15日

遼陽郊外の東方にある下平洲村という平野の村落でロシア軍偵察部隊と日本軍部隊との間で遭遇戦が発生した。この事で、日露間の大戦闘が始まった。日本軍第1軍の籠る下平洲村の東に聳える桜子山にロシア軍の一斉砲撃が行われた。この第一軍と対峙しているのが、満州第2軍の集成狙撃兵軍団の3個歩兵旅団と第10軍団の2

個師団である。数時間に及ぶ砲撃後、ロシア歩兵が強襲突撃を行って来たが、地の利を生かした日本軍の野戦築城の前に屍の山を築き上げた。

桜子山から6キロほど北にある田官屯と呼ばれる山岳部にも日本軍の第四軍が布陣しており満州第一軍と対決していた。さらに田官屯から数キロ離れた北方の上？と呼ばれる山に第三軍がいたが麓に布陣するロシア軍に逆襲をかけて撃退をした。

この第一軍、第三軍、第四軍の布陣地が主な激戦地であり、一進一退の攻防が続いた。

しかし、戦いは双方が予想だにしない形で終結するのだった。

五日間にも及ぶ戦いは日露両軍に多大な犠牲を出した。しかし、ロシア側として見れば戦略的に進展が無かった。

この戦局の状態で、ロシア軍司令官のリネウィッチは業を煮やした。現地状況を鵜呑みにして、国内の混乱終息を最優先とするロシア本国からの停戦命令と乏しい補給、日本軍の予想外の抵抗の前に焦りが募っている。

リネウィッチは、遼陽市内に軍本部を置いて指揮を執っていたが、戦局打開の一手を講じるために参謀を引き連れて戦況視察に出る事とした。

8月21日

この日、日本軍は温存していた砲火力を一点に集めて、敵陣地を砲撃する事となった。ロシア軍に日本の砲兵力が膨大にある事を錯覚させて牽制するのが狙いである。

午前10時、日本軍は第一軍が対峙する上平洲村に一斉砲撃を行った。ロシア軍からも砲撃が始まり、数時間に渡る砲撃は日本軍がもつ全ての火砲から行われた。さらに、日本軍は騎兵部隊で遼陽のロシア軍の補給路を襲撃させた。ロシア軍の攻撃目標を日本軍の砲兵から騎兵にそらす狙いがあったからだ。

日が沈み始めた頃であった。ロシア軍の陣営に異変が起きたのは。各ロシア軍が遼陽に下がる様にして、部隊の移動を始めたのだ。ロシア軍の遼陽への移動。つまり、後退であるが、各部隊には日本軍の追撃を警戒しており、余念は無かった。

日本軍としても奉天の会戦で、後退するロシア軍に追撃を行った部隊が返り討ちに合い、多大な被害を出した経験があった。

8月24日

遼陽のロシア軍から日本軍の司令部に軍使が訪れた。軍使携えてきた内容は戦争の休戦であった。日本軍の参謀将校は首を傾げた。ロシア軍の後退、現地軍からの休戦交渉。猛将と言われるロシア軍司令官のリネウィッチが指示をしたとは考えられなかったのだ。

だが、とにかくも日本軍はロシア軍との休戦勧告を受理した。

その後、次第にロシア軍の情報を日本軍は得ていった。実は、21日の砲撃の際、砲撃目標であった上平洲村にロシア軍のリネウィッチが戦場視察に訪れていた。丁度その時、日本軍の砲撃に遭遇して、内一発の砲弾がリネウィッチの近くに着弾して彼を含む部下や

参謀らを跡形もなく吹き飛ばしてしまったのだ。これは全くの偶然であった。日本軍は15日からの戦闘以来、極力砲撃を控えていた。日本軍の砲撃が無いと判断したリネウイチに油断が生じたのだろう。

しかし、その油断が彼の命を奪った。リネウイチの後任となつたのがクロパトキンであった。彼は日本軍の砲兵力に例のように過大評価をした。

日本軍の砲弾備蓄量は多くはないのに何故、これだけ打ってくるのか？しかもリネウイチの戦況視察と同時期にある。日本軍の砲兵力と情報収集力は想定以上だったのではないのか？

そう考えたクロパトキンは各部隊に遼陽までの後退を指示したのだ。

リネウイチ戦死の報告はロシア本国にも届いた。そこで改めてロシア政府は現地軍司令官のクロパトキンに日本軍との停戦を指示したのであった。

その後、アメリカでの日露交渉が始まり、講和条約が締結されるまで満州での大規模戦闘はなかった。日露戦争は終わったのだ。

第九章 惜敗

日露講和交渉は、満州での日露両軍の戦闘が終了してから約一ヶ月経って開かれた。

明治38年11月15日

アメリカのポーツマスにて日露間の講和条約が締結された。

一、ロシア帝国は大日本帝国の北緯三十九度線 平壤から元山以南の韓国に対する指導権を認める。

二、大日本帝国はロシア帝国の満州に対する指導権を認める。

三、上記の条約を恒久的平和維持に貢献するために、北緯三十九度線以北の韓国を中立地帯とする。満韓に駐留する日露両陸軍の兵力を制限する。

四、大日本帝国は、遼東半島、満州における占領地を全てロシア帝国に返還する。

五、ロシア帝国は、東洋世界の平和と安全に誠実なる貢献を果たすため旅順における海軍力を制限する。

この上記の五ヶ条が大間かな講和条約の主体であったが、満韓における日露両軍の軍備制限以外は、明治36年10月6日に開かれた日露談判でロシアが日本に提示した内容と全く変わらなかった。つまり、ロシアの要求が講和条約に通ったために、『日本はロシアに敗れた』と世界に報じられた。しかし、日本の国土を割譲や賠償

金を支払った訳でもない。陸海軍の主力は健在であった。ポーツマス条約によつて朝鮮半島における四分の三の主導権を獲得、ロシアの南下政策に終止符を打ち国土防衛には成功している。

一方のロシアは、海軍は壊滅し、満州の陸軍は暴走した事實は列国の全てが認知している。日本との戦争で得たものは無く、国内の反政府運動は勢いを衰えさせたとはいえ、ロマノフ王朝への忠誠心は大きく揺らいだ。

日本がロシアに負けたとは一概にはいえず、正確には『ロシア優勢での引き分け』と捉えた国が殆んどであった。そのため、列強の植民地支配を受けたアフリカやアジアの国々では『小さな有色人種の国が白色人種の大国と互角に渡り合う事が出来た』と、民族自決の気運が少なくとも高まり、独立運動の兆しが起き始めた。また、ロシアを敵視するトルコや北欧諸国などでも、日露戦争によつてロシアが多大な被害を被った事を受け、ロシアからの影響下の離脱する気運が高まっていた。

日本は領土こそは失わずに済んだが、多くの戦没者を出して財政は底を着いた。

『臥薪嘗胆』を合言葉に飲まず食わずで重税に耐えて、日本の勝利を信じて来た国民達の感情は遂に大爆発をした。その怒りの矛先は政府と軍部である。

桂内閣は敗戦の責任を負い総辞職した。軍部では特に陸軍が国民感情の矛先にあり、多くの幹部将校が失脚をした。

その失脚をした多くが軍官を問わず、敗戦の責任を背負い自害を

した。

明治38年12月1日

立憲政友会から伊藤博文の後継者である飛田貞直を首相とした桂内閣に替わる新内閣が誕生した。

この内閣は、国力の回復を最優先課題とし、軍備は国土と領海の防衛に限定した。

日清戦争後から日露戦争終結までの日本の国家予算の六割が軍事費に投じられていたが、戦争が終わった事によって多額の軍事費が工業や開発産業に投資される事となった。また、日本国民にはロシアへの敵愾心がまだ根付いており、これがエネルギーとなり、日本の重工業の発展に大きな拍車をかけた。

外交においては、日英同盟を継続させた事は言うまでもない。また、外貨の返済が大きな課題となった。

韓国との関係は、日露戦争中の明治37年8月22日に締結された第一次日韓協定で日本の従属国となっている。しかし、戦争中に大韓帝国皇帝高宗は、ロシア、フランス、アメリカ、イギリスに密書を送り日本の支配からの脱却を謀ろうとした事実が発覚した。そこで、明治四十年に第二次日韓協定を締結させ、韓国皇室の政治的発言権を剥奪し、韓国の国会が内政を行い、外交権を日本に譲渡する事になった。

特に『韓国皇室の政治的発言権の剥奪』に日本政府は力を入れた。『大韓帝国』から『大韓民国』へと国号が変換されたのはその強い表れである。

韓国の国防は中立地帯警備と国土防衛が主な任務で、各種兵器軍艦は日本からの輸入を受け近代化を行った。日本も『居留民の保護』を名目とした二個歩兵連隊を主体とした『韓国駐屯軍』を駐留させている。

明治42年には第三次日韓協約で、日韓の間で軍事同盟が締結された。

日本陸軍は戦後、日露戦争の敗因を背負わされ、国民からの風当たりが悪かった。その中で、大山巖元帥が飛田貞直内閣の陸軍大臣に就任した。

大山巖は大人物であった。彼は陸軍大臣の席に座るだけで、陸軍の立て直しを全て有能な部下に任せただのだ。

明治39年4月には飛田源七郎を教育総監に就かせ、新しい人材の育成と教育を任せ、児玉源太郎には参謀総長を任せ戦闘教義の刷新をさせた。

飛田源七郎と児玉源太郎のコンビは陸軍の立て直しに当たり共通の思想があった。日露戦争で得た教訓を未来を担う学生達に繋げて行き、何故陸軍は敗れたのか。何に原因が合ったのかを追求して、一方的な思考にとらわれない合理的な思考を持った人材へと教育して行く事であった。

しかし、二人のコンビは長く続か無かった。明治39年7月に児玉が倒れ、帰らぬ人となった。その後、児玉の後任に日露戦争で第2軍司令官であった奥保鞏大将が就いた。

奥保鞏も優れた軍人であり、大人物であった。つまり、勝つための方法を合理的に考えて実行する決断力に優れていた。

そして、飛田と奥も明治維新以来の付き合いであり、児玉の死後、奥とのコンビで陸軍の再建を行った。

明治41年には飛田は元帥となる。翌、明治42年に参謀長に就いた。この頃には、大山巖に次ぐ実力者となっていたが、政治的野心も無く、陸軍の再建に身を粉にしていた。

最後に飛田源七郎の晩年を書いてこの話を終わらせて、第一部を終了したいと思う。

飛田源七郎は老人となったが妻子はいなかった。周りからは養子をもらう話が持ち上がったが、飛田は拒んだ。

しかし、そんな彼が明治44年に再婚をした。相手の女性は二代であったが、何処の出生なのかは分かっていない。源七郎との間に二人の娘が出来ていた。しかしこの娘たちは、日露開戦以前に身ごもった隠し子であったのだ。

明治45年には新たに念願の男子が誕生した。だが、跡継ぎが誕生して程ないうちに源七郎は倒れた。急ぎ病院に担ぎ込まれ治療が行われたが、容体は日に悪化していく。

高熱で魘されながら、『旅順』と日清戦争で戦死した長男の名前を頻りに発し続けた。その姿と響く声は、まるで母親を呼び求める

幼い子供の様であり、見る耐えなかった。

源七郎が危篤状態となったのは暫くしてからであった。病床には妻子と総理大臣の貞直、彼の息子である陸軍軍人の身内が集まった。

「源七郎、わしじゃ。貞直だ。分かるか？」

貞直は源七郎の手を握り話しかけたが言葉が伝わっているかはわからない。

「お主の妻子はわしが面倒を見る。だから、安心せえ
そう言いながら、貞直の目から涙が溢れた。」

「陸軍の事は任せて下さい」

と、貞直の息子である軍人が膝を下ろして源七郎に言った。

「伯父上の志は自分達が引き継ぎます」

貞直のもう一人の息子が言った。この二人の兄弟は、源七郎の良き後輩であり、愛弟子であった。彼等に今出来る事は、虫の息の源七郎が安らかに旅立てる様に声をかける事しか無かった。

三人の言葉が詰まり、室内が静寂した。このまま長い時間が経過するのかと誰もが思っていた。

その時だった。弟の手を握る貞直の手に握力がかかった。目を閉じ続けていた源七郎が目を見開いた。口をパクパクと開き何かを発しようとした。

貞直と二人の息子が、顔を近づけて発する言葉を聞き取るうとした。

源七郎は必死に言葉を発しようとした。

そして、

「旅順を取れ…あそこには息子が…多くの英霊が眠っている。
旅順を取ってくれ」

そう言つと源七郎は再び瞼を閉じた。

そして再び目覚める事はなかった。享年62。

同年7月、天皇が崩御した事により明治の時代が終わった。

『旅順を取れ』

死の間際に源七郎が残した言葉と意思が、この場にいた人間達に宿り、この事から大日本帝国の歴史は、多くの血で塗り固められながら築き上げられて行く事なり、現代へと続いて行くのだった。

第一部 終わり。

第一部年表（前書き）

第一部主人公の飛田源七郎の経歴をまとめました。

第一部年表

嘉永三年 - 1850年

長門国阿武郡萩町の萩城下平安古に住む長州藩士の中級武士の家で飛田源七郎が生まれる。

元治元年 - 1864年

7月19日

禁門の変で、長州藩兵に加わった源七郎の三番目の兄が戦死する。

元治2年 / 慶応元年 - 1865年

高杉晋作の創設した奇兵隊に入り、6月の四境戦争（第二次長州征討）で初陣する。

慶応4年 / 明治元年 - 1868年

戊辰戦争会津戦争の際、軍旗を乱した部下数名を兵斬殺する。

明治10年 - 1877年

西南戦争に出征する。戦争中に源七郎の正妻が亡くなる。

明治27年 - 1894年

陸軍中将に昇進し、第3師団長に就任する。同年、日清戦争勃発により出征する。10月の旅順の戦いで源七郎の嫡男が戦死し、精神的打撃を受け帰国する。

明治28年 - 1895年

日清戦争後、軍務に復帰する。

明治37年 - 1904年

日露戦争が勃発する。第3軍司令官に就任して出征する。

7月15日

旅順郊外の丘陵『203高地』を制圧して、観測砲撃によって旅順艦隊を撃破する。

7月18日

第3軍は遼陽に向け移動する。

8月24日

遼陽会戦、日本軍の攻勢の前にロシア軍は奉天まで後退する。

10月9日

沙河会戦、ロシア軍の攻勢を日本軍が退ける。

明治38年 - 1905年

1月25日

黒溝台会戦、ロシア軍の一大攻勢の前に日本軍は窮地に陥るがロシア軍司令部内の対立により失敗する。

2月21日

奉天会戦、日本軍の攻勢の前にロシア軍は公主嶺まで後退する。

5月27日

日本海海戦、日本艦隊がロシアのバルチック艦隊を撃破する。

6月下旬

四平街の戦い、ロシア軍の攻勢に日本軍は戦線の維持が不可能になり撤退する。

7月6日

鉄嶺会戦、日本軍の殿軍の第3軍がロシア軍の攻勢を退ける。

7月30日

第3軍、遼陽に入り主力部隊と合流する。

8月15日

桜子山の戦い、ロシア軍の総攻撃を日本軍が防ぎ抜く。

11月15日

ポーツマス条約締結により日露戦争は終結する。

明治39年 - 1906年
陸軍教育總監となる。

明治41年 - 1908年
元帥となる。

明治42年 - 1909年
参謀総長に就く。

明治44年 - 1911年
再婚する。

明治45年 - 1912年
死去。享年62。

第一部年表（後書き）

次回から第二部『大東亜戦争』を始めます。
感想があつたら遠慮なく送ってください。

第十章 挫折

ヨーロッパ東部に欧州列強国の一国に列なるオーストリア＝ハンガリー帝国がある。周辺の小国や少数民族を支配する事によって国力をつけて来た国である。支配地の中に、東ヨーロッパ南方のバルカン半島に位置するボスニア・ヘルツェゴヴィナと言う地域があった。

1914年6月

オーストリア＝ハンガリー帝国の皇位継承者である皇太子フランツ＝フェルディナント大公が次期皇帝として、国民に自身の指導力を示すために夫人ゾフィー・ホテクを連れてボスニアに視察に訪れた。

6月28日

皇太子夫妻を乗せた車がボスニアの州都サラエヴォに差し掛かった時だった。

セルビア人の民族主義者ガヴリロ・プリンツィプと言う19歳の青年が放った凶弾を受け、皇太子夫妻は暗殺された。

ボスニアにはセルビア人と言う民族がいた。そして、オーストリア＝ハンガリー帝国の隣国にセルビア王国と言うセルビア人の独立国があり、ボスニア在住のセルビア人はセルビアへの統合を望んでいたためオーストリア＝ハンガリー帝国に対して反発的であった。そして今回の事件に繋がったのである。

実行犯のガヴリロ・プリンツィプはその場で取り押さえられ、共犯者も次々と捕らえられた。彼等は尋問の末、暗殺に使用した武器

などの必要品を全てセルビア政府から供給された物だと白状した。

7月23日

オーストリア⇨ハンガリー帝国政府はセルビア政府に対し48時間の期限を設けた10カ条から成る最後通牒を通達した。

セルビア政府は一部条件を除く全ての条件に同意した。しかし、一部条件の保留を口実にオーストリア⇨ハンガリー帝国は7月28日にセルビアに対して宣戦布告をする。

オーストリア⇨ハンガリー帝国とセルビアの戦争が第一次世界大戦へと発展する。その発展の原因を作ったのがロシア帝国である。ロシア帝国はセルビアを支持し、7月31日に軍に総動員令を発した。

ロシアのオーストリア⇨ハンガリー帝国に対しての宣戦布告は時間の問題であった。このロシアの戦争介入に、隣国のドイツ帝国は難色を示した。元々ドイツ帝国とロシア帝国は同盟関係にあった。しかし、ドイツ帝国第3代皇帝ヴィルヘルム2世の代で同盟関係は解消され、オーストリア⇨ハンガリー帝国と軍事同盟を締結したのである。

当時の軍事同盟は、同盟国の一国が二カ国以上の国と交戦した場合に、同盟国が参戦する義務があった。

ロシア帝国のオーストリア⇨ハンガリー帝国へ参戦すればセルビアと合わせて二カ国と戦争する事となる。即ち、ドイツ帝国もオー

ストリア＝ハンガリー帝国との同盟に基づいてロシア帝国に宣戦しなければならなくなる。

この時、ロシア帝国はイギリス、フランスとも同盟を結んでおり、ドイツ帝国のロシアへの宣戦布告は英仏の二大国との戦争も意味し、ヨーロッパ諸国とアフリカ、太平洋における植民地もが戦場となる世界大戦を意味した。

一言でまとめるとロシア帝国の戦争介入の意志一つで世界大戦に発展するのである。

ヴィルヘルム2世は、ロシア皇帝ニコライ2世に電報交渉を試みたが決裂した。この交渉の決裂によって列国の参戦と世界大戦は現実の物となった。

ドイツ帝国陸軍がロシア帝国陸軍と正面きつて戦えば兵力にまさるロシア軍に利がある。

ドイツ陸軍がロシア陸軍に勝るには奇襲攻撃しか無かった。

そして、ロシアの同盟国であるフランスが存在する。ドイツは東西に敵国がある。

オーストリア＝ハンガリー帝国軍はドイツ帝国軍程の戦略戦術が無く、フランスへの備えもドイツがしなければならなかった。

8月1日

ドイツ帝国はロシア帝国に宣戦布告し、続いて3日にフランスに宣戦布告をした。

8月4日

イギリスはドイツ帝国に宣戦布告をした。

欧州大戦の始まりであった。

日本は日露戦争以後、第一次世界大戦勃発まで積極的な外交政策を控えていた。

この時の内閣は、大正3年1月に海軍の汚職事件によって退陣した山本権兵衛内閣にかわり2月に再び飛田貞直が二度目の内閣総理大臣に就任した。

8月4日のイギリスの対独参戦に伴い、日英同盟に基づいて大日本帝国の対独参戦の旨を英国政府から打診された。

大正3年8月7日

東京の皇居にて、国家の方針を決定する御前会議が開かれた。会議の内容は日英同盟に基づく対独参戦の有無である。会議に参加した閣僚は全員参戦の方向で一致した。

続いて、軍隊の動員規模と戦線である。まず、ドイツ帝国の中国と太平洋にある植民地攻略は決定されたが、欧州方面への陸海軍の派遣が議論された。

大日本帝国は、9年前の日露戦争の傷痕が癒えていなかった。陸海軍の現役兵力は多くなく、欧州への派兵によって日本本土の防衛力は手薄になる。そこへ、アメリカなど第3国が日本に攻めて来る有り得ない事だが、可能性を懸念した。しかし、日本の財政や輸

送、補給能力が欧州方面への派兵が困難である事を訴えた。結局、欧州方面への派兵は海軍の駆逐艦部隊だけとなった。

大日本帝国の政府と軍は対独参戦の準備を進め、8月23日にドイツ帝国に対し、日英同盟に基づく宣戦布告を通達した。

しかし、一つ想定はされていた問題が起きた。ドイツ帝国が持つ中国の唯一の権益は、三東半島にある租借地の青島のみである。その青島を大日本帝国が宣戦布告をした翌日の24日に満州に駐留するロシア陸軍と旅順のロシア艦隊が青島を攻撃して陥落させた。

ドイツ帝国から青島を奪い、中国進出の足掛かりを築こうとした日本の思惑は崩れた。それでも日本軍は、10月に海軍を持って太平洋にあるドイツ帝国の植民地である南洋諸島を攻撃して占領にした。その後、日本軍は欧州方面に駆逐艦隊を派遣して、本格的な戦争の介入は無くなった。

欧州での大戦は、1916年2月にフランスのヴェルダン要塞の前にドイツ軍の快進撃が止まり、7月1日にフランスのピカルディ地方のソンムにおいて英仏軍の総攻撃が始まった。だが、ヴェルダン要塞の攻防、ソンムの戦いで英仏連合軍と独軍は決定的な戦果が出ずに到着状態となった。しかし、連合軍には日本やアメリカの支援があり戦線の維持は出来たがドイツ軍には日米の様な支援国が無く弾薬や物資が乏しくなり始めた。

そのため、1917年2月1日にドイツ海軍は『再び』潜水艦を駆使して作戦任務海上の船舶への無差別攻撃を開始したのだ。

最初のドイツ海軍潜水艦による艦船への攻撃は1914年の開戦

当初から実行しており、当初は攻撃する艦船を制限していたが、翌15年から無差別攻撃へと切り替わり、5月7日イギリスの客船ルシタニア号を雷撃して撃沈した。しかし、沈んだルシタニア号にはアメリカ人も乗客しており多くの死者を出した。この事件によって当初中立であったアメリカの世論はドイツへの反感が多数を占めるようになり、連合国への支援に回ったのであった。

そして今回のドイツ潜水艦による二度目の無差別攻撃作戦の開始とドイツの対米謀略が発覚したことにより、いよいよアメリカの地独参戦の動きを見せた。

1917年4月6日

アメリカ合衆国がドイツ帝国に宣戦布告をする。アメリカの参戦によって戦局は連合国軍に傾いた。1918年9月30日、ドイツ帝国とオーストリア^{II}ハンガリー帝国の同盟国であったブルガリア王国とオスマン帝国が連合国に降伏した。続いて11月3日にオーストリア^{II}ハンガリー帝国が降伏する。

11月11日にはドイツ帝国が連合国との間で休戦条約を調印した。ヨーロッパでの戦争は終結した。

1919年6月28日

フランスのヴェルサイユで連合国とドイツ帝国との間で講和条約が締結された。それと同時にアメリカ合衆国第28代大統領ウッドロウ・ウィルソンが、恒久的国際平和を目指す十四か条の平和原則を提言し、国際連盟が創設される事となった。

大日本帝国も戦勝国の参列に加わり、ドイツ帝国が支配していた

太平洋のマリアナ諸島・カロリン諸島・マーシャル諸島の支配権を国際連盟から委任する形で統治する事となった。しかし、委任統治とは名ばかりで実質的に南洋諸島は大日本帝国の植民地となった。

ヨーロッパでの戦争は日露戦争で疲弊した日本経済に活性化の機会を与えた。

主戦場が遠いヨーロッパであり、欧州列国が支配したアフリカや東南アジアの植民地からもヨーロッパへ大規模な動員が行われ、輸出が停止してしまった。また、戦争によって膨大な物資が必要となり、イギリス等から軍事物資の注文が相次ぎ、日本は戦争景気に花咲いた。

さらには、国際連盟の常任理事国の一国に名を上げた。これによって国際的発言力を付け、念願の列国との関税自主権の完全回復と言う幕末以来の条約改正が叶った。大日本帝国は国力、国際的発言力などが第一次世界大戦によって飛躍的な進歩を遂げたのだ。

だが、大日本帝国の発展を警戒する国があった。アメリカ合衆国である。

アメリカ合衆国も20世紀に入りようやく国内の開発が一段落し、海外進出を企てよとした。大西洋、南米、アフリカ方面は既にヨーロッパ列国の支配下であり、残るは太平洋と中国権益のみであった。しかし、アメリカの進出にとって目障りな国が日本である。

アメリカの太平洋に存在する自国領ハワイ、グアムがあり、アジアには植民地のフィリピンがある。しかし、この三つの拠点の中間に南洋諸島があり、日本の支配下に入った。中国への進出を諦めないにせよ、太平洋への進出も乗り出すだろうとアメリカ政府は警

戒した。

また、日本を国際連盟の常任理事国にまで押し上げたイギリスとの同盟関係も忌まわしかった。

日本は国力が向上したとは言え、軍事力や経済力はアメリカよりは高くない。そこでアメリカは、日本の勢力拡大に歯止めをかけるため一手を講じた。

1921年に、アメリカ合衆国の提唱で開催された国際軍事会議がアメリカの首都ワシントンD.C.で開かれた。参加した国はアメリカ合衆国、大日本帝国、イギリス、フランスの4カ国である。会議の内容は、中国、太平洋における権益の相互保障と海軍力の削減である。そして、日英同盟の解消であった。これをワシントン体制と言う。

アメリカの思惑は見事に命中した。列国との相互保障の確定によって、日英の所有する中国権益、太平洋権益を狙う勢力は無くなり日英同盟は放棄された。

そしてまもなくアメリカの策略に乗せられた大日本帝国にとっては手痛い打撃であり、外交上の敗北であった。日英同盟によって日独戦争の様に外国との戦争を行う大義名分を得て戦勝国の仲間入りをして自国の権益を広げる機会を得ていた。英国との同盟が解消された今、中国への進出と言う目標は、挫折せざる負えなくなった。

ワシントン体制の確立後、大日本帝国は再び国内の開発と自国勢力の防衛に国力を注いだ。この結果が後の技術立国日本の礎を築い

ていく事になる。

第十一章 満州事変

話を日露戦争終結後に遡る。ポーツマス条約によってロシア帝国は満州の支配権を確固たるものとする。旅順においても小型の巡洋艦に制限をされた旅順艦隊も再編された。

清国からの割譲という案が持ち出されたが、国際社会の圧力により白紙となる。それでもロシアからの投資と企業の進出によって満州の開発と入植は着々と進められた。しかし、全てが上手い様にはならなかった。ロシア帝国の支配に満州各地に匪賊ひそくという武装集団が続々と出現して、ロシア人への殺戮事件が多発した。ロシア軍は匪賊の掃討に出たが、匪賊の方が一枚上手で、遊撃戦を持ってロシア軍を翻弄させる。

そもそも満州に駐留するロシア軍自体の兵力がポーツマス条約によって10万人に制限されていた。対する匪賊は優に数百万に及んでいた。匪賊の中で特に突出していたのが『義勇党』と呼ばれる集団で、ロシアと戦う匪賊を約300万以上を束ねる一大集団で、ロシア内外から一目置かれた組織である。匪賊を掃討する筈のロシア軍が、逆に匪賊に掃討される有様であった。

匪賊とロシア軍との戦いは十数年続いた。その間、300万の集団を持つ義勇党内部で大きな変化が起きて来た。満州人民の自由と平等が義勇党の原動力である。その思想が『義勇党を中心とした満州人民の自由と平等』へと変わった。義勇党独自の社会主義に似た思想が芽生え始めて来たのだ。

義勇党とロシアとの争いは1917年、第一次世界大戦中に起きたロシア革命を持って終了する。

日露戦争以降、ロシア帝国内は混乱と貧困が続いてきた。しかし、ロシア帝国が大日本帝国に辛勝したことで反政府運動の抑制には繋がったが反政府側は次の機会を持っていた。

そして、サラエボ事件に端を発した第一次世界大戦の介入とドイツ帝国軍へのロシア帝国軍の敗北を機に反政府運動団体は一大革命を始めた。1917年の二月革命によってロシア帝国ロマノフ王朝は潰え、ゲオルギー・リヴオフを首相とする臨時政府が成立する。

しかし、成立して間もない臨時政府は同年十月の革命によって倒れ、臨時政府と二重政府状態だったボリシエヴィキと呼ばれる派閥が主導権を握り、ソビエト・労働者・農民・兵士のボリシエヴィキ内の『評議会』に権力を移譲させた。

この革命政府内の抗争とドイツの戦争の混乱に乗じて、旧貴族、軍人、自由主義者など反革命政府派勢力が白軍を組織して蜂起した。ロシアで内戦が起きた。

しかし、このロシア内戦はボリシエヴィキ政府側に利があった。ボリシエヴィキの支配地域はロシア全土の9割以上を占めており兵の大規模徴集が可能であった。また、ボリシエヴィキ政府はこの内戦に乗じてロシアの勢力圏内にある満州の義勇党に接近した。

この時、義勇党はすでに満州の裏政府として君臨して内部組織は独自の社会主義体制に染まっていた。

義勇党とボリシェヴィキ政府はある条件を持って盟約を交わし、満州、シベリア方面の白軍を義勇党の協力を持って攻略していった。

一つ余談に、ロシア革命による大日本帝国のロシア干渉戦争についてを書く。ロシア革命によって社会主義思想が世界に飛び交った『全ての平等』が社会主義の根幹である。つまり日本の国家の在り方である天皇制を真つ向から批判するもので、日本政府は社会主義思想を敵視した。日本のみならず諸外国も其々の理由の下、社会主義を警戒した。

1918年に第一次世界大戦も大局が決し、大日本帝国を含む列国が連合軍を持って『革命政府からチェコ軍団（オーストラリア＝ハンガリー帝国軍の捕虜）』を救出を名目に挙って出兵した。

大日本帝国軍は韓国軍と共に出兵し、樺太、ウラジオストクなど沿海州の沿岸南部を限定に戦った。この戦いで日本軍将兵は『日露戦争の恨み』を合言葉にボリシェヴィキ政府側の労働者や農民を中心としたパルチザンに善戦した。予想以上の快勝に酔ってウラジオストク以北への北進も検討されたが、国力の事情により取りやめられ、列強各国軍の撤退に伴い撤兵した。この戦いを後に『沿海州出兵』と呼ぶ。

義勇党の敵であったロシア帝国は倒れた。だが、新しい敵は幾等でもいた。清朝滅亡後に組織され、ロシア帝国に換わって満州の支

配権を得た北洋軍閥の奉天派である。

1911年に革命家の孫文の主導の下、辛亥革命によって清王朝は滅亡した。その後、中華民国が新しい中国の国家として誕生したが、清国の元政治家であった袁世凱が政権を握り独裁を行ったため、再び中国国内は混乱した。

袁世凱の死後、各地方勢力が乱立して群雄割拠の内乱状態になった。その中の一つが北京を拠点とする北洋軍閥である。そして奉天派とは、北洋軍閥内の派閥の一つで、張作霖を首領として満州の奉天を拠点に、ソ連からの支援を受けて北洋軍閥を束ねていた。

当初、義勇党もソ連の有効勢力である北洋軍閥の奉天派に助力して中国統一の支援をした。ところが、1928年に華南の広州を拠点とする蒋介石率いる国民党の北伐に敗れた。これにより北洋軍閥による中国統一の可能性は潰えた。この結果に義勇党は北洋軍閥への謀略を謀った。

6月4日

北京から奉天に向かう列車があった。その列車には張作霖が乗車していた。国民党への敗北による奉天への敗走であった。

真夜中を列車が満州の殺風景の平野を走行している最中であった。突然爆音が轟き、暗闇を照らす炎が燃え上がった。列車が爆発を起こしたのだ。この爆発で張作霖は死亡した。

義勇党の仕業であった。程なくして義勇党と奉天派の抗争が勃発した。そして程なくして奉天派は国民党になびき、その傘下に吸収された。以後、国民党をも攻撃の標的となる。

満州を舞台に繰り広げられる同国民同士の血で血を流す戦いの中でもう一つ、満州に存在する勢力であるソ連は、着々と重砲や装甲車を満州へ増派していった。

1931年9月1日

満州の都市ハルピンで義勇党党員の先導による大規模な中国人の社会主義デモが起きた。当初、警察によるデモの中止を図ったが失敗し、一夜を明かすと更にデモ参加者の人数を増やしていた。この時、満州は義勇党とソ連の工作によって社会主義思想が全土に浸透していた。そして、デモの勢いが武力蜂起への変貌を兆して来た。

この事態を受け、中華民国は軍隊を出動させてデモ隊を威圧による抑制に乗り出した。ところが、デモ隊は軍の出動を受け『平等への弾圧』と称し、武力衝突が起きた。

中華民国軍はデモ隊との戦闘範囲をソ連居留民地区外と制限して戦った。ここでソ連と衝突すればデモ騒ぎでは収まらない事態に発展するからであった。しかし、事態は結局最悪の方向へと転んでしまふ。

9月7日

ハルピンのソ連人居留民地区にて複数のソ連人の射殺体が発見されたのだ。そして、ソ連の政府と軍は素早く行動を起こした。ソ連政府はソ連人殺害を受けて『中華民国政府による社会主義思想の弾圧と殺戮』と非難した。そして軍への出動を命じた。名目は『居留民と同胞の保護』である。同胞とはこの場合、義勇党の事を意味する。

同日、満州に駐留する在満ソ連軍は中華民国軍への攻撃を行い、沿海州方面のソ連軍も続々と満州に侵入した。

ソ連軍の満州侵攻を受けて中華民国総統の蒋介石は、満州方面から軍を撤退させるように命令を出した。ソ連は中華民国に対して宣戦布告は通達していなかった。ここで中華民国軍がソ連軍に対決の姿勢を示せば、全面戦争は免れない。そして満州は、もはや社会主義の巢窟と化しており、社会主義者の掃討は不可能と判断したからだ。軍を自勢力内まで後退させて防御線を築き、今後の処理を国際連盟の場で処理する方針を立てたのだ。

中華民国軍は戦わずして満州から撤退した。蒋介石の読み通り、ソ連軍は侵攻地域を満州に限定して軍を瞬く間に全域に展開させて行った。

1932年1月1日

ソ連軍は満州全土の制圧を完了した事を宣言した。前年の9月初旬に始まって僅か3ヶ月弱での完遂である。

この満州占領した後、ソ連は満州の支配権を中国人に返還する旨を宣言した。しかし、その支配権の返還先となったのが、中華民国勢力の撤退後に満州で唯一の勢力となった義勇党であった。

これが、1917年に義勇党とボリシェヴィキの間で交された条件である。義勇党は満州を実効支配下に置き『満州義勇党』と改称する。そして、満州の中華民国からの独立を発表して『満州国』を建国宣言した。

第十二章 中満戦争

ソ連の陰謀によって建国された満州共和国を中華民国は国際連盟の場で訴え、加盟各国が中華民国の立場を支持した。特に常任理事国の大日本帝国とその同盟国である大韓民国からの支持は大きかった。

韓国にしてみれば社会主義国家がソ連に続き二カ国が自国と隣接する事になり、国内の社会主義勢力が活発になる可能性がある。韓国の同盟国の日本にしても、韓国で社会主義革命が起きれば日本にも飛び火する事は火を見るより明らかである。

反社会主義国家にとっても決して対岸の火事ではなかった。

1933年2月に国際連盟の総会で満州国解体案が大多数の賛成で可決された。しかし、国際連盟の満州建国への非難がソ連の連盟脱退に繋がってしまう。

これにより、ソ連は満州共和国の開発の自由権を得た。そして満州共和国にしても、ソ連からの支援を受け、国家体制の基盤が固められて行き、軍隊においても兵器の供給を受け、軍備の近代化に拍車がかかった。

満州共和国の軍備拡張は周辺国の勢力均衡を崩してしまった。事態を重く受け止めた大日本帝国、大韓民国、中華民国の三カ国は将来の戦争に備えて軍拡を始めた。そして自然と満韓中立線、中満国境線に両国軍が部隊を多数配備させて行き、緊張状態となった。もし、満州との国境で戦争が起きれば、戦火は極東アジア全てを巻き込む大戦争へと突入する。世界の注目を集めた。

ワシントン体制後からの大日本帝国について語る。

第一次世界大戦後の戦後恐慌、続く関東大震災、昭和恐慌と日本国内は震災や恐慌による不況に見回れた。しかし、時の内閣はアメリカのニューディール政策を参考にして、国内の開発や内需拡大と韓国、中国向け製品や兵器の輸出によって辛うじて景気の回復を見出した。

軍事について、昭和初期の大日本帝国軍の戦略思想は世界最高水準に達していたと言っている。いいだろ。

昭和5年 - 1930年 - の時点で日本軍の陸軍常備兵力は13個の師団で20万の常備兵力であった。この兵力で敵国から日本と韓国を防衛して行くために精神主義にとらわれない合理性を求めてあらゆる戦略研究が日夜行われた。そして、導き出された結論と言うのが新兵器の積極的導入と運用による新戦術の考案であった。この新兵器と言うのが、飛行機と戦闘車輛である。その後、満州事変を経て師団の増設が進められた。

海軍においても、昭和10年時の主要艦艇は、

戦艦4隻

(内、艦齢20年以上が2隻)

重巡洋艦4隻

(内、艦齢20年以上が2隻)

軽巡洋艦8隻

(内、艦齢20年以上が4隻)

航空母艦6隻

(内、小型空母2隻)

駆逐艦32隻

潜水艦18隻

その他補助艦艇数十隻

これらの艦艇を2個の艦隊にまとめたのが日本海軍の全力であった。この海軍が仮想敵国と定める米英海軍の強大な艦隊に勝つためには、陸軍同様に航空機の戦略的な運用と潜水艦の活用が決め手となる事を結論付けた。

仮想敵国と比べて、日本軍の少ない戦力でいかに効率的に勝つて行くか。日露戦争以降、常に己れを知り、相手を知り合理的可能性を追求する軍隊へと成長していた。

後に、東アジアの国々を巻き込んだ戦争は『極東大戦』と呼ばれ、日本では『大東亜戦争』と呼ばれる。大戦は、満州と中華民国との国境線での衝突が発端となって勃発した。

だが、戦争の火蓋を切ったのは満州でも中華民国でもない。中華民国国内に勢力を持つ、中国共産党である。中満両国を交戦させ、漁夫の利を得て支配地の拡大と中国全土の社会主義革命をもたらすため起こした策略であった。

1937年7月5日

北京郊外から程近い所に中華民国と満州共和国の軍事境界線があった。その境界線には中満の軍が睨みあっている。そこへ中国共産党の工作員が満州側陣営に向かい銃撃を行い満州兵数人を射殺した。

満州軍は中華民国軍からの銃撃と決め、部隊を越境させて中華民国軍に攻撃を加えて一帯を占領した。大東亜戦争における『中満戦争』と呼ばれる戦争の始まりである。

翌日には戦闘の事実が両国の報道機関によつて国民に知れ渡る。だが、戦闘の状況や経緯等よりも、相手国への無法な攻撃の非難が主な内容を占めていた。そして、いよいよ中満両国の国民感情は、満州事変以来の対立に火が着き両国世論の大半が敵国討伐に沸いた。

同7月6日

満州政府は、中華民国政府に対して数力条の要求を実質の最後通牒と言う形で提示した。

・満州共和国独立の容認

・中華民国政府が拘束する社会主義者の解放と国内の社会主義の容認

・日本、アメリカ等からの兵器供給の停止

が主な内容であった。この最後通牒が中華民国総統蒋介石に届けられるが、蒋介石は迷わず満州からの要求の拒否を通達して、徹底抗戦の意志を表明した。

7月7日

満州政府は占領地の拡大と戦線への部隊の増強を決定する。

満州は、短期決戦を持つて中華民国軍を各個撃破した後、華北地方を占領下に置いて講話を成立させる戦略を立てた。一方の中華民国は、華北地方で満州軍を人海戦術を持って撃破して講話に持ち込

む戦略を立てた。

この時、中満両国は、互いに支援国である日本とソ連の派兵要請という考えには至らず、当事国のみで事を済まそうとした。しかし、中華民国と満州共和国の戦火は、華北を主戦場にして長期化して激しい攻防が繰り広げられた。この間、両国は総力戦の構えをとり、進まぬ戦況に双方の軍は増援を送り続け、数百万に達する軍勢が入り乱れた。

戦争は大局を見い出せぬまま、年を越して1年目が過ぎた。この総力戦は発展途上国である中華民国の基盤に大きな打撃を与えた。

戦争によって国民の生活が貧窮した。中華民国の国民は、満州に対するかつての反感を忘れ、国民党政府に対する反発が強くなった。そして、この国民の反感を逆手に取り、戦争形勢を揺るがす一大事が起きる。

かつての北洋軍閥奉天派の首領張作霖の息子で、現国民政府全国陸海軍副司令官の地位にあり、前線に立つ張学良が反乱を起こした。彼は張作霖爆殺後に奉天派を継ぎ、軍閥を就いたが早々に蒋介石の国民党に降伏して、改めて満州の支配権を得た。しかし、満州事変によって彼の満州は社会主義者によってあつという間に奪われてしまった。だが、張学良の恨みの矛先は蒋介石に向けられた。蒋介石は満州への出兵どころか撤兵を行った事を義勇党以上に根に持った。これが彼に反乱を決意させたきっかけである。

張学良は、中国西北部と華北部を支配下に置き中華民国からの離脱を宣言した。これによって、前線の中華民国軍の指揮系統が大混

乱した。そのため多くの兵士が張学良に付くか、満州軍の捕虜になるかで分かれてしまい、現役兵の大半を失う大被害を招いた。

更に国内の共産党が四川地方の内陸部を拠点に各地で武装蜂起を起こして中華民国軍に攻撃を開始した。現役兵を大量喪失して、有効な対処のとれない中華民国軍は各地で共産党軍に敗北を続けた。この局地戦での共産党の連勝が、貧窮に苦しむ人々の支持を集めて行く。

中華民国は、各方面から攻撃を受け、敗北を重ねて支配地の多くを失い続けた。開戦から1年3ヶ月経過した10月時点の中華民国の勢力圏は、長江以南から華南地方の平野部までとなってしまうた。

劣勢の戦局に追い込まれた蒋介石は、遂に大日本帝国に派兵の要請を始めた。しかし、日本からは「検討中」と言う返事しか帰ってこず、再三に渡って派兵を要請した。帝国政府は派兵の有無に躊躇していた。

もし、日本が中満の戦争に介入すれば、満州の友好国であるソ連の対日参戦を招くのは目に見えていた。だが、中華民国の防衛は、日韓の安全保障上欠かせない問題である。

最終的に帝国政府は、日本のの方針を天皇陛下の英断で決める事にした。即位して14年目、37歳の若い天皇に大日本帝国の国運を任せたのである。

天皇の決断は揺るぎないものだった。かつて日露開戦を下し、最大の国難に立ち向かった祖父明治帝の時代を現在と重ねた。そして皇居に内閣閣僚、元老の前で告げた。

「危機に瀕する友国を助け、運命を共にせよ」

この言葉に大日本帝国の方針は決まった。

第十三章 日本介入

1938年11月1日

大日本帝国は中華民国救援のために陸軍6個師団を派兵し、韓国には同国軍と共に満州に侵攻するため3個師団を送った。そして、北海道には駐屯する第7師団に加えて2個の師団を配置してソ連の上陸に備えた。海軍は日露戦争以来の戦時編成である連合艦隊を組織して日本近海の防衛と海上補給路の警備に当たった。

日本の介入によって、風前の灯火であつた中華民国は窮地を一応のところ脱した。中国戦線での反撃作戦の第一段階に、まず日本陸軍航空隊の戦闘機部隊が制空権確保のため動いた。日本陸軍の低翼単葉戦闘機である九七式戦闘機は、旋回性能と格闘性、操縦性、射撃安定性が満州空軍が使用するソ連製の戦闘機であるI-153やI-16より優れていた。また、日本軍の航空兵力が満州軍の航空兵力よりも勝っていた事も要因にあり制空権は短期間に日中側に傾いた。制空権を確保した後、陸軍航空隊は満州軍地上軍や兵站、補給路への空襲を行い戦闘能力の削減に務めた。

12月4日

中国へ派遣した日本軍部隊の集結が完了し、反撃作戦は第二段階に移る。現在、日中連合軍は長江を境に、中華民国の首都である南京から約50キロ西方の対岸に位置する都市儀征を拠点に布陣する満州軍と対峙していた。

長江以北全域を占領下に置く満州軍を駆逐するには長江を渡河しなければ事は始まらない。日中連合軍の航空部隊は、長江対岸部の儀征にほど近い渡河予定地点に連日空爆を行い防御陣地破壊に努めた。また、日本海軍の艦隊が東シナ海の満州軍占領地沿岸部まで接

近して陽動作戦を行った。

12月20日

日中連合軍の大部隊が航空隊の支援の下で長江を渡河し、満州軍への逆襲に出た。満州軍は日頃の空襲によって戦闘能力を消耗され、通信系統も破壊された状態で各部隊間での統率に影響を及ぼしていた。まともな迎撃が取れないまま日中連合軍の渡河を容易に許してしまい、各個に分散していた中小の部隊が日中連合軍に撃破されて行った。また、日本軍は迅速な部隊の移動を行うために、騎兵に代わる装甲車両装備部隊も実戦投入された。中満の戦争は、日本軍の新装備の試験に最適な場所を提供したようなものであった。装甲車両部隊も騎兵に劣らない機動力を發揮した。そして、騎兵に勝る攻撃力と防御力を持つて満州軍を襲い、戦果拡大に貢献をする。

儀征の戦いを制した日中軍は、満州軍の中国国内での掃討に向けて軍を北進させた。

1939年3月9日

山東省の省都済南で日中連合軍は満州軍に決戦を挑み、6日間の戦いの末に打ち破る。同年7月末に北京を制圧する。この時点で勝敗は決したかの様に見えた。しかし、そうではなかった。満州軍はなおも中国に増援を送り、日中連合軍に抗戦の構えを取った。この頃には戦争の動向を見守っていた四川方面を制圧下に置く中国共産党や西北部を拠点とする張学良の勢力が動いた。元々両勢力と満州は油と水の様な関係であったが、満州が敗れば次の矛先は自分たちに向けられる。共産党と張学良、満州が日本と中国国民党に共闘する体制を取った。連勝を重ねる日本軍であっても兵力は中華民国軍に比べれば少ない。日中連合軍は4個の軍団・日本軍の名称は『軍』を編成して方面に分かれ、日本軍は中満の国境付近で満州軍と戦い、中華民国軍は西北部で張学良と共産党勢力と戦う。

9月、華北の石家荘で中華民國軍の軍団が張学良と共産党軍との戦いに敗れて敗走した。このため、敵軍の士気を挙げさせたばかりか日中連合軍は軍団の配置転換を余儀なくされた。そして戦力が減った分、残りの軍の強いられる負担が大きくなる。

石家荘の戦いを境に満州軍が逆襲に転じた。満州経由で主要兵器を供給された張学良の勢力と共産党にが中原部に進攻し、日中連合軍の兵站基地として機能していた主要都市を陥落させ補給路の遮断を図った。日中連合軍もただ敵の策略に翻弄されるままではなかった。日本本土からの増援軍が中国に上陸した。中国の戦争は、2つの陣営に分かれた複数の国や勢力が入り乱れる泥沼の戦局に陥った。

日本の陸海軍の戦略の中枢である大本営では、満州国内への侵攻の是非が議論された。余談だが、大日本帝国憲法の規定によって政府が戦争の意向を固めれば、後の戦争遂行は軍部が行い政府は干渉できない。これを統帥権と言う。

中国での戦局を打開するために将来、ソ連との全面戦争覚悟で満州に攻め込むか。中国の戦線は戦いが長引けば日本は疲弊する。中華民國国内は厭戦気分が高まり戦争所では出はなくなる。

ソ連製の装備を使用する満州軍との戦争でソ連軍の装備の分析が出来た。装備の質では日本はソ連に勝てなくとも負ける事は無い。しかし、ソ連の物量には負ける。日露戦争は、ロシアの勢力内から集結したロシアの大軍団と物量に日本軍が敗れた。ロシアへのトラウマが日本軍の主要人達の脳裏を支配していた。

この時、満州やソ連に放たれた日本の諜報員は情報収集に明け暮れ、様々な情報網や協力者によって満州の軍事情報を得て日本へと

送って行った。そして、彼らの得た情報を総合した結果、在満ソ連軍が本国より重砲や軍用車両、航空機を満州軍に供給する一方で自軍の部隊にも配備され増強されていた。そして、ウラジオストクの海軍基地でも同様で、シベリア鉄道を通して軍艦の資材を輸送させて現地で建造させて進水させていた事がわかった。つまり、極東ソ連軍は日本との戦争の準備を進めていた。

仮にソ連との戦争をしたとしても、どの時期に停戦をするかが問題となる。停戦の時期を誤ればソ連の物量に大陸で戦う日本軍は撃破され、中国、朝鮮半島もソ連の勢力下になり、最悪の場合は日本本土に進攻される可能性もある。

日本政府も日露戦争の時の様に海外に人材を派遣し、日本の正当性を主張するとともに外貨獲得に励んでいた。アメリカは日本を支持した。しかし、日露戦争の時ほどの支援は得られなかった。日本が中国での戦争で満州や社会主義勢力を一掃と国力の低下を望んでいた。日本に代わって自分らが中国に進出するために、ヨーロッパでも同様であった。イギリスやフランスも日本の支持を示すも、勢力を拡大するナチス・ドイツの動向に注視しており、日本への支援をする余裕がなかった。

第十四章 日ソ開戦

大東亜戦争の中で最大の戦いとなる日本とソ連の戦争は、後に始まるヨーロッパでの戦争に少なくない影響を与え、第二次世界大戦の戦いの参列に加えられる事もある。

1939年10月

大本営で満州進攻の議論とは裏腹に、韓国に待機している日本軍と韓国軍の連合軍と39度線以北の中立地帯を境に対峙する満州軍との間で緊張は限界に達し、戦闘を交わしていた。

当初は双方が航空機を飛ばし合って偵察活動を行っていた。次第に両方の偵察飛行の回数が増えて行き、ついには互いが撃墜し合う空中戦を繰り広げるようになる。果ては、日韓連合軍と満州軍の地上部隊が中立地帯を越えて互いの領地を直接侵入して偵察をするようになった。この偵察部隊を撃退するための両軍の戦闘が連日発生するようになる。そして偵察を行う部隊も戦力を充実されて行き、斥候任務から威力偵察へと任務が変わっていき、最終的には中立地帯を巡る戦いへとなった。この時点でポーツマス条約で交わされた満韓中立地帯の項目は既に形骸化していた。

日韓連合軍は、自衛戦闘を名目に39度線以北の中立地帯の制圧に乗り出した。満州軍は形勢が不利となると、何も抵抗をしないで本国へと撤退して国内から日韓連合軍に砲撃を加えた。日韓連合軍も反撃をして、韓満国境地帯で砲撃戦が連日行われた。

同じ頃、旅順とウラジオストクのソ連海軍の艦艇が、黄海と朝鮮

ソ連の正規軍の常備兵力は160万に達している。その内の三分の一の兵力に当たる約50万の兵力が極東に配置されている。日本軍には兵力で勝り、歩兵を主力とする韓国軍には装備する兵器の規模で勝っていた。そして、満州軍を加えた連合軍は、三つの方面から朝鮮半島に侵攻を開始した。

一つは、韓国と満州の国境を流れる鴨緑江の河口にある満州の丹東から韓国の新義州へ。この方面は、在満ソ連軍の軍団が当たる。

次に、満州の通化から韓国のアムノク川を渡り江界を攻める。この方面は、韓国の狼林山脈ランリムが連なる山岳地帯であり、侵攻の主力を担うのが満州軍の歩兵から成る軍団である。

最後に、ソ連領内のプリモルスキー地方のハサンから、かつて中国の領土で、沿海州と呼ばれていた、韓国の清津をソ連軍が攻め込んだ。

迎え撃つ日韓連合軍には作戦は無いことは無かった。戦場は朝鮮半島であり、広大な中国本土と違い狭い半島であるため敵の動きを想定し易く地の利があった。そして、朝鮮半島は日本同様に、国土の大半が山岳地帯であり、機械化されたソ連軍の侵攻を撃退できる公算があった。また、韓国に攻めるソ連と満州の連合軍の全力は、日韓連合軍の兵力の三倍に達していなかった。つまり、攻める側が守る側に勝つためには攻める側が守る側よりも兵力を三倍にして当たる『攻撃三倍の法則』を満たしていなかった。最後に、日本軍は唯一数で勝るソ連軍と満州軍に航空兵力で勝っていた。

11月17日

新義州から南の定州で日ソ両軍の最初の戦闘が起きた。双方の戦力が軍団規模で戦火を交える会戦である。

B T - 5 戦車の部隊を先頭にして迫り来るソ連軍に対し、迎え撃つ日本陸軍の戦力は韓国に駐留する4個師団全力である。その内、3個師団は日本本土から派遣され、残り1個師団は在韓日本軍の部隊を増強させて師団に改編させた部隊である。そして、4個の師団全てが歩兵師団であった。

日本軍は機械化された部隊の実力を、中国の戦線に投入しており知っていた。

小銃や機関銃の弾を弾き返し、機動力に優れて機関銃や砲を装備する装甲車は戦う側から見ても目障りな存在である。だが、機械化部隊の実力を認知した日本軍は、戦果と同時に弱点を把握していた。そして、将来の戦争に備えて対機械化部隊の対策の研究をしていた。

前哨戦は、日本陸軍航空隊の制空権確保から始まった。数日間、定州の上空で日ソの戦闘機のプロペラのエンジン音と機関銃の発射音が常に鳴り響いた。空中で交える機体は九七式戦闘機とI - 16であり、性能差と戦術、戦力が相まって制空権は日に日に日本側に傾いて行った。

日本軍が制空権を確保した後、爆撃機をもってソ連軍地上部隊を空襲した。爆撃の目標は主に砲兵部隊である。しかし、爆撃によつての砲兵部隊殲滅は出来なかった。空襲の度にソ連軍砲兵部隊は、大砲に偽装を施したためである。それでも、ソ連軍砲兵部隊の被害

は少なくない。損害は勿論、部隊の移動に支障をきたした。日本軍の狙いはむしろそこにあった。

砲兵部隊の移動を妨害して、砲撃支援の無い侵攻部隊と対決するのが作戦であった。また、日本軍は対決に備え部隊の編成に手を加えた。陸軍の師団は、三個から四個の歩兵連隊を基幹部隊として、砲兵、工兵、騎兵、輜重兵の独立した兵科部隊を揃えた連合部隊である。歩兵連隊以外の部隊を解体して三、四個の歩兵連隊の指揮下に加えた。歩兵連隊を軸とする諸兵科連合を駆使して、戦術単位で敵を撃退するのである。

日露戦争で騎兵第1旅団を指揮した秋山好古少将は、騎兵の弱点である防御の貧弱を補うため、騎兵旅団に歩兵、砲兵、工兵の諸兵科を加えた混成旅団にさせて世界最強のコサック騎兵と互角以上の戦いを繰り広げた。

騎兵第1旅団を参考に、歩兵の打撃力の不足を砲兵が補い、築城能力を工兵で補い、高い偵察を騎兵で補い、部隊の兵站を輜重兵が補う事によって欠点を抑えて利点を活かした戦いを出来るようにした。

定州会戦は、日本軍がソ連軍の攻撃を防ぎ撃退した。航空隊の空襲によりソ連軍は部隊間の連携が取れないまま日本軍の陣地に攻め、日本軍の砲撃による逆襲を受けた。部隊が壊乱する中、夜間に日本軍の御家芸である夜襲を受けて、多くの車両に火炎瓶を投げつけられた。各方面でも似たような戦法によって士気を挫かれた。

ソ連軍は、日本軍の逆襲を警戒して20日に新義州まで撤退する。

第十五章 朝鮮戦線

定州で日ソ両軍の戦いが繰り広げられていた頃、越境して韓国
江界を目指す満州軍と韓国軍が衝突した。

韓国軍は、日本軍を模した編成となっている。朝鮮半島は陸続き
の大陸国であるのは言うまでもない。そして、隣り合う隣国は敵国
の満州とソ連である。そのため安全保障上、韓国軍は陸軍を重視し
ていた。

韓国陸軍の常備兵力と予備役は、日本陸軍を上回る規模である。
が、自動車や戦闘車両は未だに一部部隊のみの配備で、大半の部隊
の移動手段は鉄道や徒歩である。軍用機の数や運用構想も日本軍の
程ではない。しかし、満州軍やソ連軍を韓国国内の山岳地帯で迎撃
する戦術思想の下で、山岳戦に特化した部隊となっている。そして、
戦力の不足は日本軍の協力で補う手筈となっている。

最後に、韓国軍は兵士の質で満州軍に勝っていた。満州軍は現役
兵から成る多くの戦力を中国に送ったため、韓国に派遣した部隊を
構成する兵士の多くは予備役や教育期間の短い新米兵士であった。

満州軍の韓国侵攻の基本戦略は、ソ連軍の援護であり、人海戦術
で韓国軍と対峙して日本軍への援護を妨害するのであった。

江界で戦う韓国軍と満州軍には戦力的に大差なく、日本軍直伝の
夜襲攻撃で満州軍の侵攻を食い止めた。

韓国では、日本の名称である『大東亜戦争』を『祖国防衛戦争』
と言う名称で通していた。開国以後、列国の思惑に翻弄され、不満

が積みもり続けた国民感情がソ連と満州の侵略によって爆発しのだ。

清津を目指し本国から侵攻するソ連軍に対しても、韓国軍は虎の子の機械化師団を加えた重火力に特化した軍団を投入させ、ソ連軍の進撃を食い止めた。

ソ連軍は、日ソ開戦時の軍の動員には成功した。しかし、日韓連合軍の戦闘能力に対する情報収集には失敗をした。

失敗の背景には、いまだに根強く続く人種差別に原因があるだろう。黄色人種に対する根も葉もない白色人種の優越感がソ連の諜報活動に影響を及ぼした。

ともかくにも韓国に攻めたソ連軍は日本軍と韓国軍の奮戦によって出鼻を挫かれる結果となる。

ソ連は直ちに極東への戦力増援を決定した。また、一方で中国への軍を派遣も決定した。

中国方面は韓国に比べて二つの陣営は膠着状態にあった。日本軍は、朝鮮方面への軍の派遣を最優先した。また、内地を防衛する戦力を残さねばならないため、中国方面へは兵站の輸送を除いて部隊増援は厳しい状態であった。そのため、中国方面の日本軍は占領地の防衛で手一杯であった。

特に前線で戦う中華民国軍の疲弊は著しい。一連の戦いによって帰る場所を失った兵士が多く、精神的なストレスで軍規の乱れが生じていた。

満州に駐留していたソ連軍は中国に入り、韓国で受けた教訓から

日本軍との戦闘を極力避けて中華民国軍への攻撃を集中した。

日本軍ほど高い戦術や戦略の無い中華民国軍は、ソ連軍の攻勢を防ぎ切れず次々と防衛線を突破されていく。

1940年1月には、再び日中連合軍は逆襲によって占拠した占領地から撤退して南京まで退いていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4073o/>

道の向こう

2011年8月23日10時47分発行